



古墳時代の 玉作りと 神まつり

2015 古代歴史文化協議会

ごあいさつ

近年、平城遷都 1300 年、古事記編纂 1300 年、伊勢神宮と出雲大社の遷宮などの節目の年が重なり、国民の皆様の間で、日本という国がどのようにしてできたのかなど、古代社会に対する関心が非常に高くなってきています。

また、2020 年は、日本書紀編纂 1300 年、東京オリンピック、パラリンピック開催の年にあたり、国内外から日本の歴史文化により注目が集まると考えています。

そこで、個々の地域における研究では見えにくかった日本の大きな古代史の流れを解明するため、古代歴史文化の調査・研究・啓発に関心のある 14 県が連携して「古代歴史文化協議会」を設立し、共同調査研究を行うことといたしました。

協議会では、古代の政治や祭祀を解明する上で重要な「古墳時代の玉類」をテーマとして数年かけて調査研究を行い、その成果をシンポジウムや展覧会などの形で皆様に広く情報発信してまいります。

その第 1 回として「古墳時代の玉作りと神まつり」と題した講演会を開催することといたしました。

古墳時代の人々にとって大変貴重であった「玉」がどのようにつくられ、まつりの場でどのように使われたのか、また「玉」をめぐる地域間の交流はいかなるものであったのかなど、古墳時代の「玉」に関わる謎について、基調講演とパネルディスカッションにより探っていきます。

本講演会を通じて、皆様の古代の歴史・文化への関心がさらに高まることを願っております。

開催にあたり、共催いただきました読売新聞社と、御指導・御協力いただいた関係者・関係機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 11 月 15 日

古 代 歴 史 文 化 協 議 会
会 長 島根県知事 溝 口 善 兵 衛

第1回 古代歴史文化協議会講演会

古墳時代の玉作りと神まつり

14:30~14:40 開会あいさつ

古代歴史文化協議会会長 島根県知事 溝口 善兵衛

14:40~15:50 < 基調講演 >

「たまと玉作り - 玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉 -」

國學院大學名誉教授 梶山 林継

: 資料P1~8

15:50~16:00 休憩

16:00~17:30 < パネルディスカッション >

「玉作り遺跡の調査と研究」

コーディネーター 丹羽野 裕 (島根県教育庁文化財課長)

パネリスト 梶山 林継

埼玉県 (埼玉県立さきたま史跡の博物館	山田琴子) : 資料P9~12
石川県 ((公財)石川県埋蔵文化財センター	伊藤雅文) : 資料P13~16
奈良県 (奈良県立橿原考古学研究所	卜部行弘) : 資料P17~20
鳥取県 ((公財)鳥取県教育文化財団調査室	小山浩和) : 資料P21~24
島根県 (島根県教育庁古代文化センター	岩橋孝典) : 資料P25~28

日程: 平成27年11月15日(日) 14:30~17:30

場所: よみうり大手町ホール

主催: 古代歴史文化協議会
読売新聞社

表紙: 奈良県野山15号墳出土メノウ製勾玉
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵)

裏表紙: 島根県堂床遺跡出土の玉作り関連遺物
(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

たまと玉作り

－玉作り遺跡調査の回顧とまつりの玉－

國學院大學名誉教授 梶山 林繼

1. はじめに・・・日本列島の「たま」

- (1)形状 (2)材質 (3)製作 (4)使用法
(5)思想(信仰) (6)研究史

たまは古くから身近に飾られてきたが美しいだけでなく、呪術的、信仰上から身に付ける必要性のあったことが考えられる。

何を美しいとするか、のみではなく何故身に付けなければならないか、それぞれの時代による認識の異なりも考えてみなければならない。

日本列島に住んだ人々が、どのような「たま」を愛したのか、どう考えていたのか見ていきたいと思う。

縄文時代は土器をつくり、使用した時代で、今から1万3千年ほど前から3千年前ぐらいまで約1万年間の長い時間で、この間に種々変化してくる。今から6千年、あるいは6千5百年ほど前の縄文時代前期には多くの「たま」が使われている。動物の牙や骨、貝殻、石製の丸玉・管玉、コハクの玉などであるが、特に石製の耳飾りに球状耳飾りが流行する。中国大陸の碧、琮などと共にある珉に似た形のもので、大阪府藤井寺市国府遺跡(6,000～5,000年前)、福井県金津町桑野遺跡(6,500年前)をはじめ栃木県や群馬県下の墓地から発見されている。また富山県上市町極楽寺遺跡、長野県松川村有明山社遺跡などでは滑石質の石や蛇紋岩などで多量に制作していたことがわかっている。

縄文時代の特色を示す「たま」にヒスイの「大珠」がある。鱈魚節形に形を整えたヒスイの展石に孔を一つ穿ったものを典型的とし、形は種々あり、ヒスイではない石もある。ヒスイは新潟県糸魚川市の姫川を中心とした地域で産出されるもので、縄文時代中期にもっとも流行するとされる。

縄文時代には、この他種々の岩石(雑玉)による勾玉、丸玉や真珠も貝塚から出土している。

弥生時代は2千数百年前から1千8百年前頃までの時代で、半島製の「たま」も入り、玉作りも行われる。

この時代の特色的な「たま」の一つに碧玉製の管玉

がある。その後古墳時代にも長く続けて作られ、使用されるが、その多くは不透明、青黒色のもので、太・細は流行がある。この管玉の内、新潟県佐渡産の赤玉石(鉄石英)使用の極細の管玉は、弥生時代後期初頭頃の特種なもので、製作地が限定され、分布は北海道にまで及ぶ興味深いものである。

また弥生時代のガラス勾玉は、ほとんどは九州が製作地であるが、型で造られ、鉛ガラスを原材料としている。ガラスの管玉や、小玉等もあるが、勾玉はその形状といい、製法、材質に特異性を持っている。

この時代のヒスイ製勾玉も北部九州を中心に多く出土しているが、異型勾玉とされ、通常の頭部の孔の他に縦に孔を穿つものがみられる。

古墳時代になると、今日まで残されている点数は非常に多く、その材質も多様化し、形状も時間的変化が窺えるなど複雑なものとなる(図1)。石製はヒスイ(硬玉)、碧玉、緑色凝灰岩、蛇紋岩、滑石、蠟石、メノウ(赤)、水晶、化石(コハク)、その他。ガラス製。金属製(金、銀、銅、鉛)。埋木。(木の実、草の実)。真珠。土製。

形状は勾玉、管玉、丸玉、平玉、小玉、棗玉、切子玉、(白玉)、ミカン玉、ネズリ玉、トンボ玉、空玉、子持勾玉、(玉杖)等々。やはり時代による流行がある。この字状となった勾玉は6世紀頃であり、メノウ勾玉を2個並べて使用するの、はやっていたようである。

飛鳥・奈良時代になると男女ともに服装が変化したため装身具が大きく変わってくる。但し仏像などの荘厳具としての「たま」は多量につくられるし、神社の神宝などにも残る(図2)。最も多いのはガラス製であり、真珠も多い。

また祭祀用の滑石質岩石による玉も消えていく。

2. 玉作り・・・玉の生産

「たま」の生産にふれる前に、研究史を少し見ておこう。玉そのものについては江戸時代にも谷川士清『勾玉考』、木内石亭『曲玉問答』、木原権臣『曲玉考』などがあるが、明治以降、島根県の「出雲玉作」が注目

され、玉湯神社周辺は大正11年、国の史蹟となる。昭和2年3月、濱田耕作・島田貞彦・梅原末治『出雲上代玉作遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第一〇冊が刊行される。

遺跡の発掘調査による工房址等の報告とは異なるが、玉製作遺跡として重要な報告となる。玉作り研究で、昭和三十年代後半から発掘調査を通して次々と研究発表していったのが寺村光晴氏である。

まとまったものに『古代玉作の研究』国学院大学考古学研究室報告第三冊（昭和41年9月 吉川弘文館）、『下総国の玉作遺跡』（編著）（昭和49年 雄山閣出版）、『古代玉作形成史の研究』（昭和55年12月 吉川弘文館）等がある。『古代玉作の研究』に大場磐雄の序文があり、経緯と寺村氏の性格を語っているので抄出すると「氏は早くから縄文文化の研究に志し、殊にその垂玉の問題から硬玉と加工技術等についても興味を持っていたが、偶々昭和三十六年石川県片山津玉造遺跡の調査とその報告書作製とが、藤田先生の没後国学院大学の^{大場}研究室の手に委任されたので、当時私の助手であった氏は、調査員の一人として終始この仕事に従事し、発掘に調査にひたすら精進をつづけたのであった。これを契機として、氏の古代玉作に関する情熱は異常に昂まったらしく、爾来数年間は全く玉に憑かれたように寸暇を割いて東奔西走、各地を踏査し資料を蒐集したが、中でも千葉県成田市八代や、島根県松江市東忌部中島の玉作遺跡の発掘は、予期以上の好成績を挙げ、工房跡の検出その他前人未見の新事実を知るに至り、研究に一層の拍車をかけたことであった。

寺村氏は新潟県の生まれで、暫く郷里で教鞭をとる傍ら、考古学の研究を行っていたが、縁あって国学院大学に入学、昭和三十年学部史学科を卒業後直ちに大学院に入り、修士から博士の過程を終了し、その間私の助手及び国大講師となり、本年からは和洋女子大学助教授に任命された。氏の性格は所謂越後人特有の勤勉着実と強い忍耐性とを具え、文字通り一步一步目的に向って正確に進む方針で、その通り実行されたが、学問上にもよく示され、どんな些事をも確認せずばやまぬ克明さと、調査の綿密さは、私達同じ考古学を学ぶ者にとって範を示しているといっても過言ではない。故に本書の内容は敢て私が贅言を加える要もない程正確周到な考察から成っている。特に遺跡における工房跡の考察や、遺物における攻玉工程の技術及び現代の攻玉技術との比較等は、最も精彩あるものであろう。なお古代の玉作はこれを職とする部民の専業であった。上代職業の考察は、我が国産業史上の重要な

テーマに属するが、その方面についても文献を駆使して述べている。」昭和四十一年八月付の文である。

こうして寺村氏は昭和35年8月からの藤田亮策を中心とする片山津玉造遺跡の調査、その没後、大場研究室での整理、報告書の刊行から、玉の未成品等の実測を通して、昭和37年には初めて目的を持った調査を千葉県成田市で行なうことになる。以後次々と行なわれた調査に、小生昭和39年4月から寺村氏の後を受けて、大場磐雄先生の助手となったこともあって、参加し手伝うことになった。

3. 玉作りの工房

古墳時代の玉作り工房は、独立した工場があるというのではなく、住居内、多くは竪穴住居の一部で、生活すると共に生産活動を行っていた。しかし、生産工程の中で、常に水を使用する玉作りには、独特の施設を有し、このため竪穴構造が一般の住居址と少々異なってくる。

実例を見ることにしよう。

(1) 加賀、片山津玉造遺跡（石川県加賀市片山津町大字上野）（図3上）

紫山潟の西南、潟を望む台地縁端部、竪穴住居址26棟、周囲開田工事もあり全貌はうかがえない。

第6号址は南北7.2m、東西7m、隅丸方形の平面形、壁の直下には幅8～20cm、深さ12～14cmの周溝が巡る。東壁中央に接し工作用二重孔がある。この二重孔は1.4×1.26m、深さ10～8cmの方形の落ち込み、その中央に径68×55cmの円形ピットが掘り込まれている。その深さは1.1m。孔底には白色泥状物が沈積し、砥石及び原石が発見された。主柱穴は4本、炉は中央やや西にある。管玉未成品は最大のもので径1.4cm、長さ4.1cm、小型の未成品もある。

第2号址、隅丸方形、中央で東西6.6m、南北7.32m、東壁が6.6mとやや長い。主柱穴4本、炉は中心よりやや南にあり、南北が長く1.6×0.6m。東壁中央近くに東西に連結するピットがあり、東壁よりのピットは径64cm、底径40cm、深さ68cm。他の方は、上縁径55cm、底径22cm、深さ66cm。2つのピットを結ぶ溝は、長さ85cm、幅30～45cm、深さ25cm、断面はV字形。東壁よりのピットから原石の粗割したもの、一部加工したものがあつた。また炉の北側に径110×95cm、深さ15cmの皿状のピットがあり、ここから大型の原石塊3個、管玉未成品が少量出土した。

(2) 下総、八代玉作遺跡（千葉県成田市大字八代字花内：現成田市玉造）（図3左下）

印旛沼東岸台地上にあって、昭和37・38年調査。この部分は県史跡に指定され、保存されているが、周囲は成田ニュータウンの造成により破壊された。

3号址は平面ほぼ方形、但し北壁は開墾により破壊されており確認されていない。復原されたプランは南壁の長さ4.6m、西壁4.2m、東壁4.6m、北壁4.7m、壁は垂直に近く、壁の下には深さ8cm、幅10cm断面U字形の溝が周る。主柱穴4本、炉は西側柱穴間にあり、65×25cm、工作用ピットは2個あり、1個は東南隅近く、円形で径53cm、深さ35cm、底部には約3cmの灰白色の泥状砂質土が堆積していた。また小型で砂岩質の砥石3片が出土している。もう一つの工作用ピットは東壁に接し、中央南（南壁より1m）にかたよって位置し、平面長方形で2段に掘り込んでおり、まず90×70cm、深さ11cm、その南半を50×58cm、深さ35cm、底部で35×42cmとしたものである。遺物は、竪穴の全面にわたり検出されているが、主として東南半に玉類未成品及び剥片が多くみられ、平面長方形の工作用ピットにもっとも密集し、南壁中央部に発見された完形の甕形土器周辺にも群在していた。

(3) 出雲、忌部中島玉作遺跡（島根県松江市東忌部町字中島）（図3右下）

宍道湖にそそぐ野代川の上流、忌部の谷を流れる忌部川の右岸、山裾の先端部にある小さな台地上に竪穴住居址が1棟確認された。

住宅の裏の崖面に断面が現われていた住居址で四壁を確認できなかったが、約3分の2が調査され、工作用ピットも調査できた。

住居の東半が残っており、東壁の長さ3.95m（壁の上で4.3m）、南壁は工作用ピットが中心にあったと考えられることから、壁の下側で4.7m（壁の上で5m）、平面プランは梯形（台形）で南壁が大きくなる。主柱穴はなく、炉は中央北よりにある。工作用ピットは南壁に接し、段をもって方形に掘られ、住居中央側左右にピットを持つ。南北115cm、東西84cm、徐々に深くなり、底部径42×23cm深さ47cmとなる。この中から小型の壺が発見されたほか、多くの石材剥片が出土している。またピットの東側にやはり小型の土師器壺があり、この中には研磨材が入っていた。また炉の中からはメノウ勾玉1個が出土しており、炉の北東側には2本のピットを伴うと見られる大凹砥石が据えられていた。なお東壁の北側に白玉群が、同南側に有孔円板群が検出されている。

(4) 越中、浜山遺跡（富山県下新川郡朝日町字宮崎浜山）（図4上）

新潟県境に近い宮崎海岸から500m程内陸部で海岸低地部に向って延びる小さな舌状台地の一つにある。傾斜する台地上でやっと検出した竪穴住居址であるが、東壁5.25m、南・北・西壁は5.15mほどに復原された。主柱穴は4本で、中央に炉を持ち、主柱穴以外の柱穴も検出されている。工作用ピットは東壁中央にあり、東西1.65m、南北1.7m、深さ約40cmで半円状、2段になる。上段は溝状となっている。ピット内には硬玉や滑石の剥片が多量にあり、硬玉・滑石製勾玉未成品、管玉・白玉未成品もあった。

北壁沿いにもう一つ平面長方形の大型ピットが検出された。東西2.78m、南北1.18m、深さ60cmで、周囲に小さなピットを持つ。ここから管玉の研磨未成品が約50個、その他硬玉原石剥片、滑石勾玉・白玉・剥片、内磨砥石、土器などが発見されている。

4. 玉と信仰

(1) 子持勾玉（図1・S）

当時の信仰がわかる考古資料として子持勾玉がある。この名称は現代のものであるから、当時の人々が何と呼んでいたかはわからない。現在日本列島で500個ぐらいある。朝鮮半島にも9個ほどある。同時に発見された遺物があり、遺構の年代が明らかな出土例を見ると、5世紀を中心として流行したものと見える。古くとも4世紀と思われる。流行の終りは6世紀と思われるが、ごく一部に7世紀以降のものがあるようだ。

最も多く発見されているのは関東、中部、近畿だが、九州から東北まで分布している。江戸時代から「石剣頭」などとも呼ばれ、注目されたことから、偽物も多くある。大きな勾玉の背や腹、両脇に子勾玉が付着しているもので、大きさは10cm前後で、20cmを越すようなものはない。多くは祭祀遺跡から出土しているが、古墳や住居址からの出土も報告されている。

勾玉が勾玉を生む、増加することを表していると考えられ、増産、豊饒などを祈って作られたのではないかとされている。

(2) 長野県、玉依比売命神社の児玉石

長野県（長野市松代町東条）の玉依比売命神社の児玉石神事は江戸時代にも著名なもので、木内石亭『曲玉問答』や伴信友『神名帳考證』などにもふれられている。大場磐雄は詳細に調査し、報告しているが、毎年正月七日に数えると玉の数が増加しているというも

のである。

大場の調査は昭和17年で、子持勾玉9、勾玉481（硬玉111、碧玉20、メノウ126、水晶4、滑石171、雑石41、ガラス2、練物6）、管玉35、切子玉4、丸玉5、小玉3、そろばん玉1、有孔円板1、この他石器時代有孔玉器3、同時代玉類16、磨製石鏃1、その他自然石などあって昭和17年では769顆で、この年も1顆増とある。ふえる石には「生れ石」、「来り石」があり、この玉類は生石であって、毎年兎を生じて増加すると言う。

5. おわりに

古くから日本列島人は 鏡、剣、玉を大切にし、信仰している。いずれも人間が作ったものでありながら、ある条件が与えられると神のものとなり、力を持つことになる。玉が魂と通じたり、霊と通じたりする。我々の心の不思議さを我々は理解できるであろうか。



富山県浜山遺跡玉作り工房（1967（昭和42）年4月撮影）

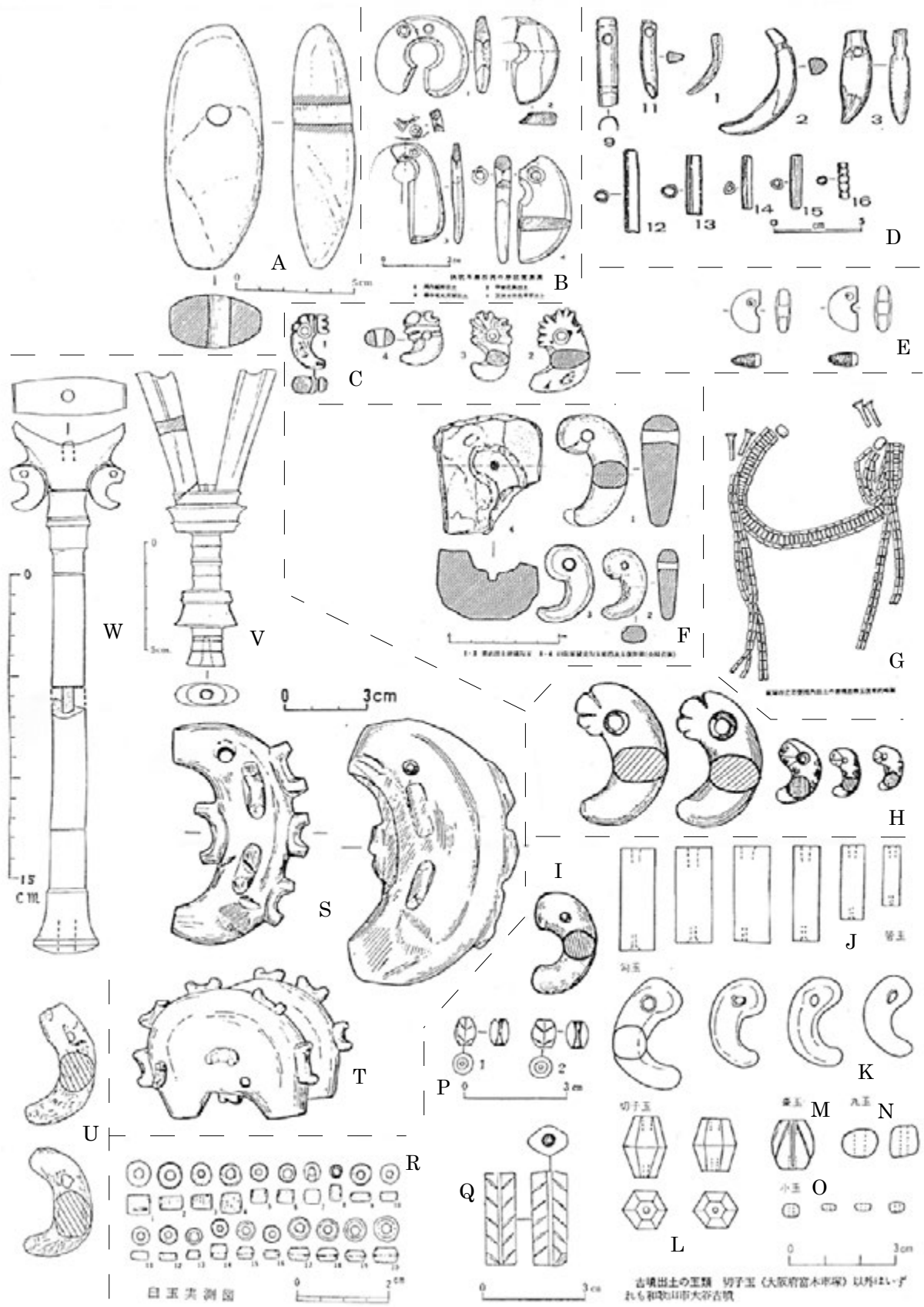
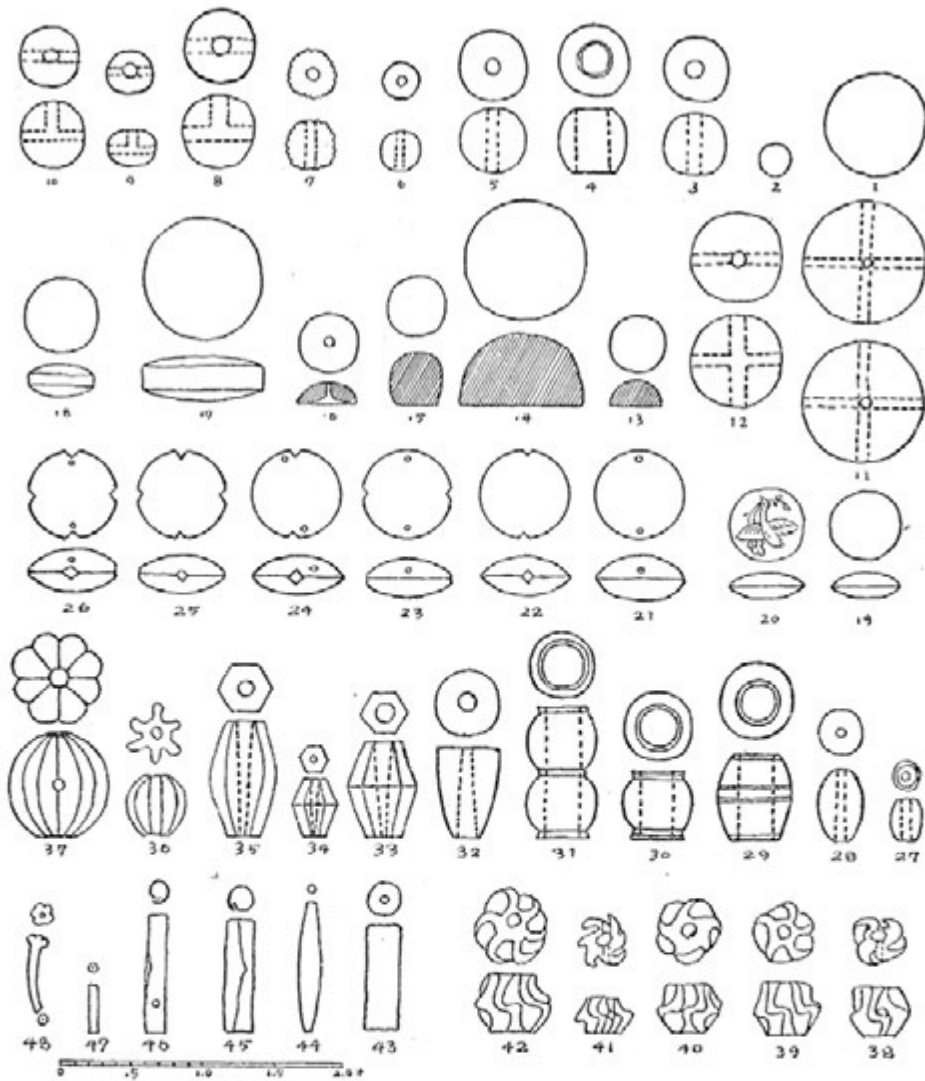


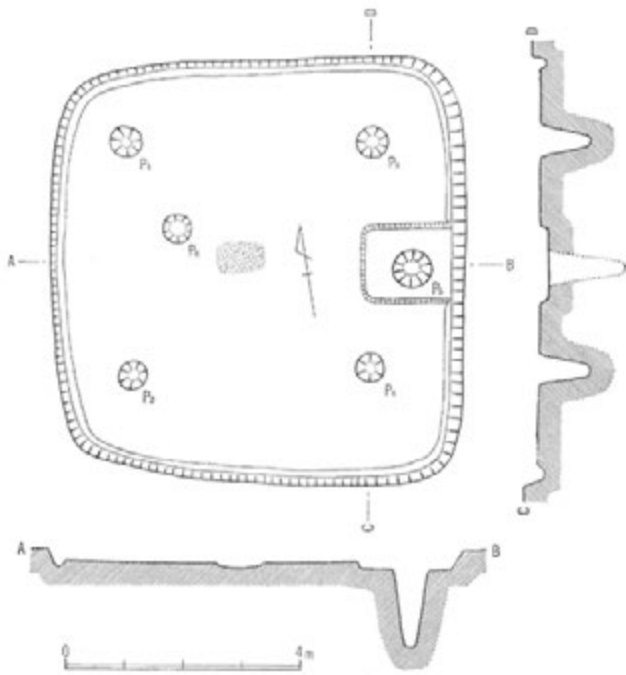
図1 玉の種類



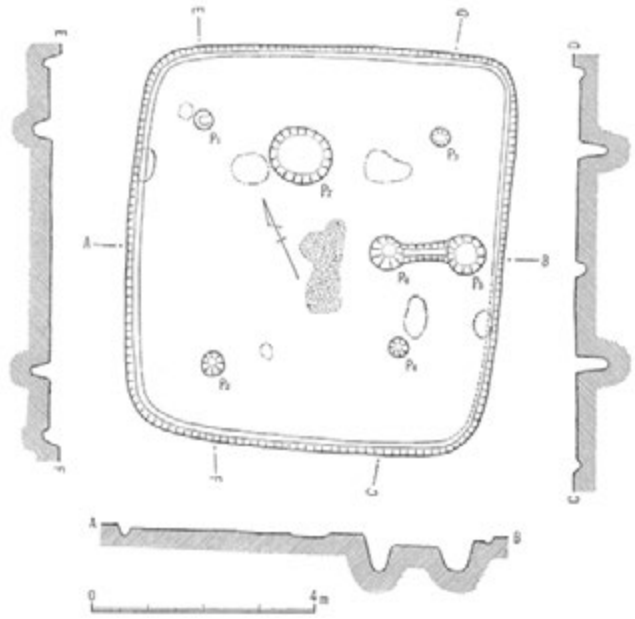
一其 圖成集類玉代時良奈 圖一第

- 玉刺製角黒(4) 玉刺蛤蜻(3) 玉丸珀琥(2) 玉丸晶水(1)
 玉辻晶水(8) 玉刺子提菩(7) 玉刺檀白(6) 玉刺銅金(5)
 玉辻瑠璃黄(12) 玉辻銅金(11) 玉辻珀琥(10) 玉辻珠眞(9)
 玉脣瑠璃(16) 玉球半晶水(15) 玉球半珀琥(14) 玉球半晶水(13)
 玉平鍍撥牙紅(20) 玉平石白(19) 玉取面晶水紫(18) 玉取面瑠璃(17)
 玉棗製角鹿(29) 玉數誦實蓮(28) 玉棗晶水(27) 玉平銅金(26·21)
 玉子切晶水(33) 玉棗半晶水(32) 玉瓢製角鹿(31) 玉棗製角鹿(30)
 玉梔山銅金(37) 玉梔山瑠璃(36) 玉子切晶水(35) 玉子切珀琥(34)
 玉管珊瑚(47) 玉管銅金(46·44) 玉管瑠璃(43) 玉淚瑠璃色雜(42·38)
 玉管子丁(48)

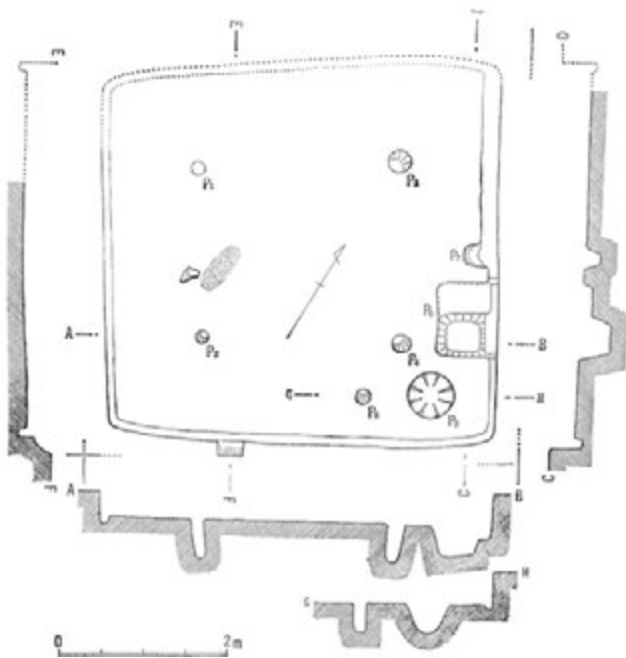
図2 石田茂作「奈良時代に於ける玉の種類と用途」『鏡劔及玉の研究』昭和15年9月 考古学会



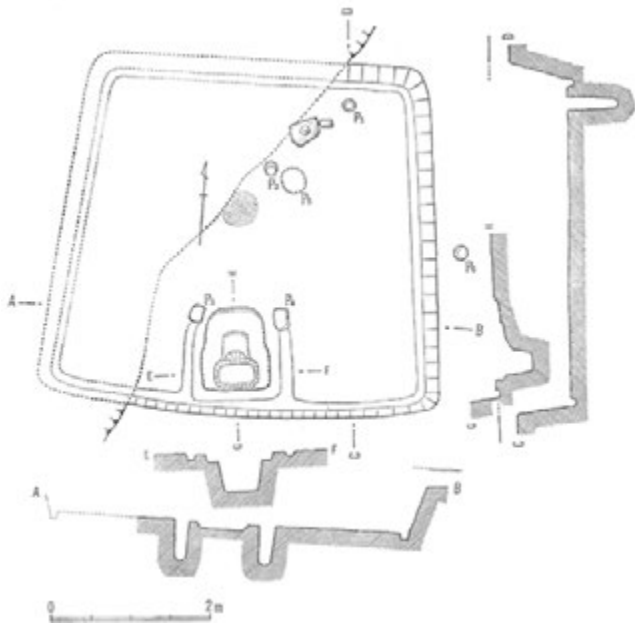
石川県片山津玉造遺跡第6号址実測図



石川県片山津玉造遺跡第2号址実測図

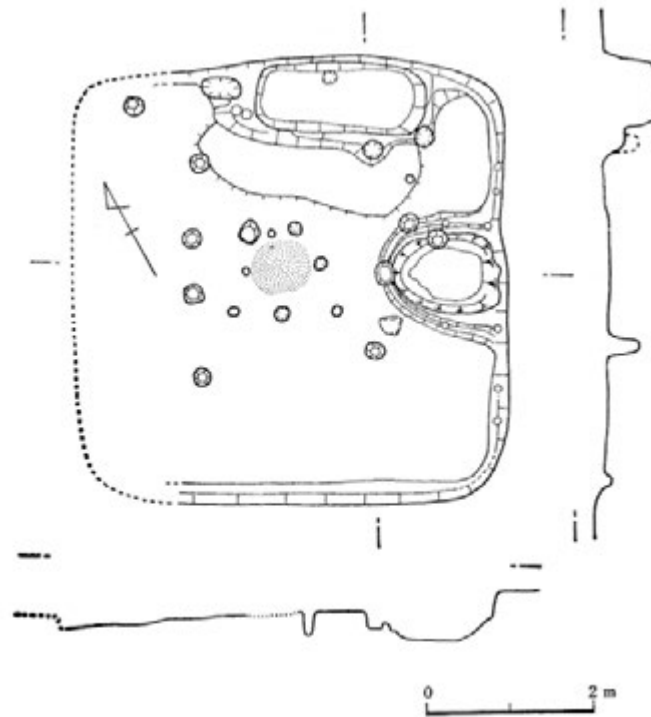


千葉県八代玉作遺跡第3号址実測図

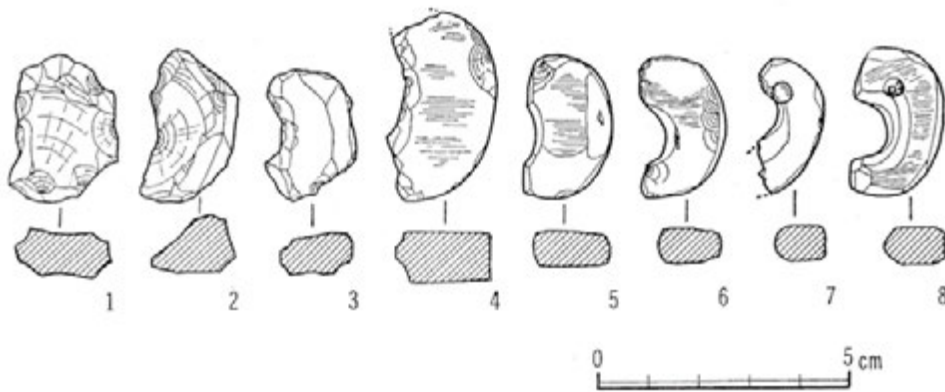


島根県東志部中島玉作遺跡第1号址実測図

図3 玉作りの工房（寺村光晴「古代玉作の研究」昭和41年9月 吉川弘文館）

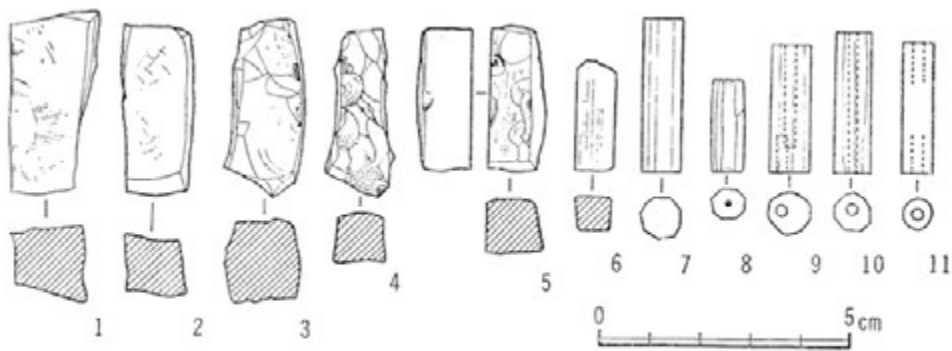


富山県浜山遺跡第1号址実測図



勾玉の製作工程（後原技法）

1 形割工程, 2 側面打製工程, 3~6 研磨工程, 7 穿孔工程, 8 仕上工程。 碧玉
島根県松江市東总部（总部神社蔵）



管玉の製作工程（加賀技法）

1.2 形割工程, 3.4 側面打製工程, 5~7 研磨工程, 8-9 穿孔工程, 10-11 仕上工程 緑色凝灰質燧質頁岩
石川県片山津玉造（加賀市教育委員会蔵）

図4 玉作りの工程（寺村光晴「古代玉作形成史の研究」昭和55年12月 吉川弘文館）

埼玉県の玉作り遺跡について

埼玉県

(埼玉県立さきたま史跡の博物館 山田 琴子)

1. はじめに

埼玉県には、古墳時代前期の玉作り遺跡が3ヶ所発見されている。これらの遺跡では緑色凝灰岩を用いて管玉を作っていたことが確認されている。また、玉作り遺跡から程近い場所に、緑色凝灰岩の産地が知られている。今回、3遺跡から出土した緑色凝灰岩の石材と、産地から採取した原石の鉱物組成を分析して比較を行った。これにより、埼玉県内の玉作り遺跡と石材産出地との関係について考えてみたい。

2. 埼玉県内の玉作り遺跡

埼玉県内では、ひがしまつやまし そりまち いせき おけがわし まえはらい東松山市反町遺跡、せき かわじままちしょうじき いせき桶川市前原遺跡、川島町正直遺跡で古墳時代前期の玉作り遺跡が確認されている(図1)。反町遺跡(図3)、前原遺跡(図4)は発掘調査によって玉作りを行っていた工房址が発見された。両遺跡とも緑色凝灰岩製の管玉、勾玉の他に水晶製、メノウ製の勾玉を製作していたことが確認されている。一方、正直遺跡(図5)は農業用送水管の工事中に発見された遺跡である。緑色凝灰岩製管玉の未成品と、砥石、土師器、木製品といった遺物が確認されたが、遺構についての詳細は不明である。

また、反町遺跡から北西に約5km離れた東松山市くずぶくろ葛袋に緑色凝灰岩の産地が知られている。ここでは約1500万年前から1000万年前の地層が堆積し、緑色凝灰岩を含む礫岩層と共に貝類やサメ等の化石を産出している(図2、写真1)。

3. 分析について

県内の3遺跡から出土した緑色凝灰岩製管玉の未成品と葛袋で採取した緑色凝灰岩を、X線回折装置で鉱物組成を分析して比較を行った。X線回折は資料の結晶構造を調べるものであり、今回の分析では資料に含まれる鉱物の種類から資料の関係性を大まかに推定している。

分析の結果、葛袋で採取した緑色凝灰岩は鉱物の組成から大きく4つのグループに分けられた(表1)。

色調や質感といった点ではバリエーションに富んでおり、鉱物組成と肉眼での観察の結果との対応は見られなかった。

反町遺跡から出土した資料は鉱物組成から2つのグループに分かれた(表2)。色調や質感からも2つのグループに分かれ、鉱物組成の違いとも対応することが確認された。

前原遺跡から出土した資料は鉱物組成としては1種類であった(表3)。色調は1種類であり、質感では2種類に分かれたが、鉱物組成の上では同一であることが確認された。

正直遺跡から出土した資料は、鉱物組成から2つのグループに分かれた(表4)。色調と質感からも2つのグループに分かれ、鉱物組成の違いとも対応することが確認された。

なお、葛袋から採取した石材に含まれるオパールAという鉱物は、石が風化すると共に水分が抜け石英に変化する。葛袋で採取した石の外側と内側を測定して鉱物組成を調べると、内側は外側に比べてオパールAが多く含まれている。一方、出土した資料からオパールAが検出されていないのは、年月が経って資料の表面の風化が進んでいるためと考えられる。これらの結果をまとめたものが図6である。

4. おわりに

埼玉県内の玉作り遺跡では、葛袋で産出した緑色凝灰岩を使用していた可能性が高いことが確認できた。なお、石川県、鳥取県、島根県では関東地方よりも早い時期から玉作りが行われていたため、関東地方の玉作りはこれらの地域から強く影響を受けていると言われている。石川県、島根県の緑色凝灰岩も鉱物組成を分析してみたところ、石川県は石英と玻璃長石、島根県は石英と雲母類が特徴的に検出された。こうした特長は葛袋の石材には見られないことから、玉作りの技術は石川県や島根県の影響を受けながらも、石材は現地で調達していたことが窺える。

関東地方では埼玉県以外にも数多くの玉作り遺跡が確認されているが、他の地域でも埼玉県のように現地で石材を調達していたのか、また緑色凝灰岩以外の石材はどのように調達されていたのか、工房で作られた玉類はどこへ行ったのか、今後も追及していきたい。

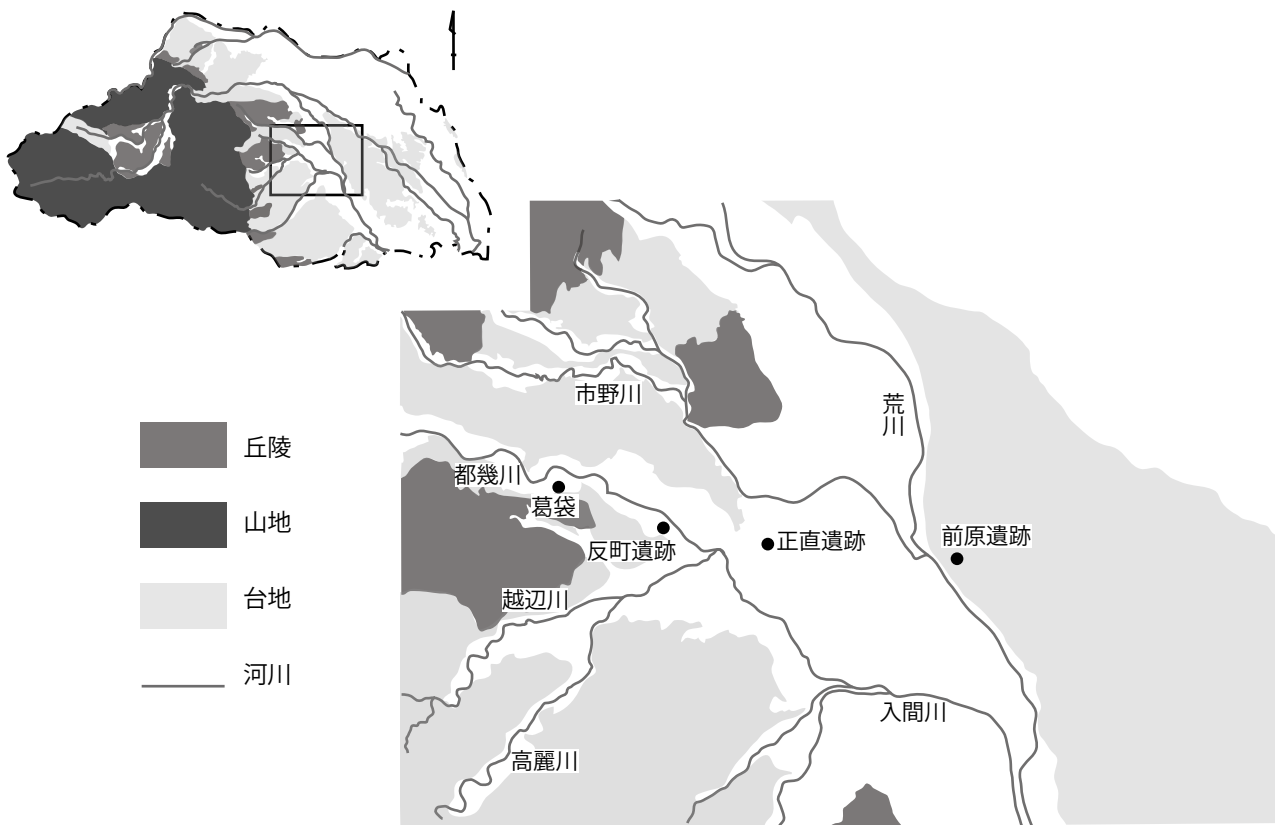


図1 遺跡の位置



図2 葛袋周辺の地質図（東松山市教育委員会 2015 『埼玉県東松山市葛袋地区化石調査報告書』より引用）



写真1 葛袋で採取した礫岩層

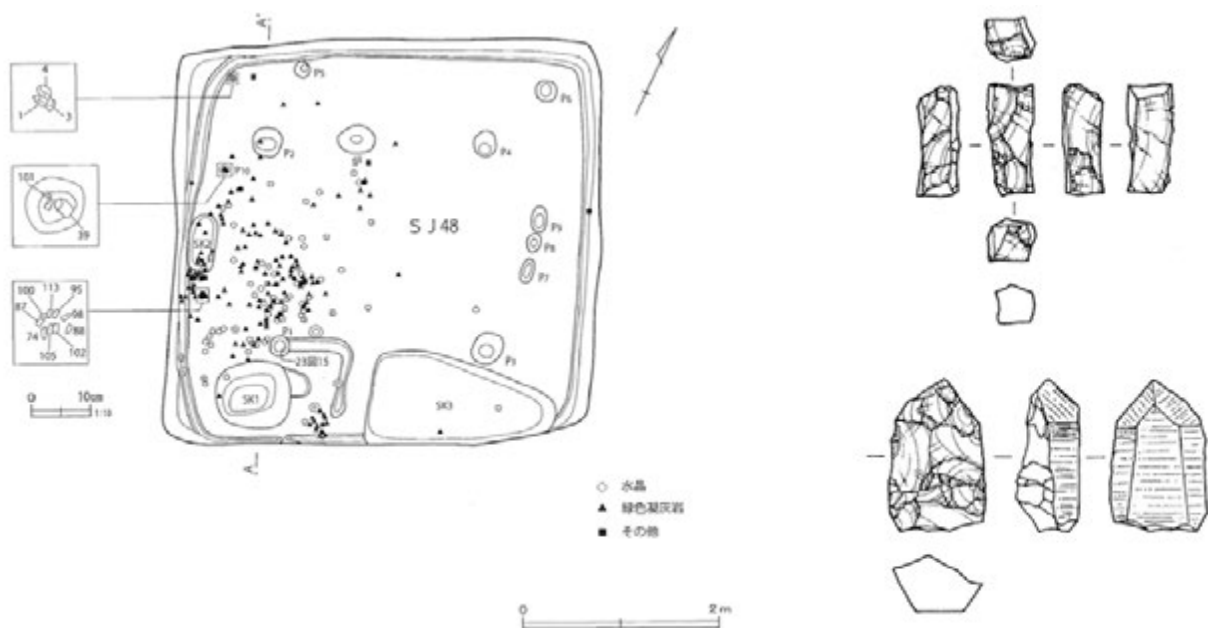


図3 反町遺跡の玉作り工房と未成品

(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012「反町遺跡Ⅲ」より引用)

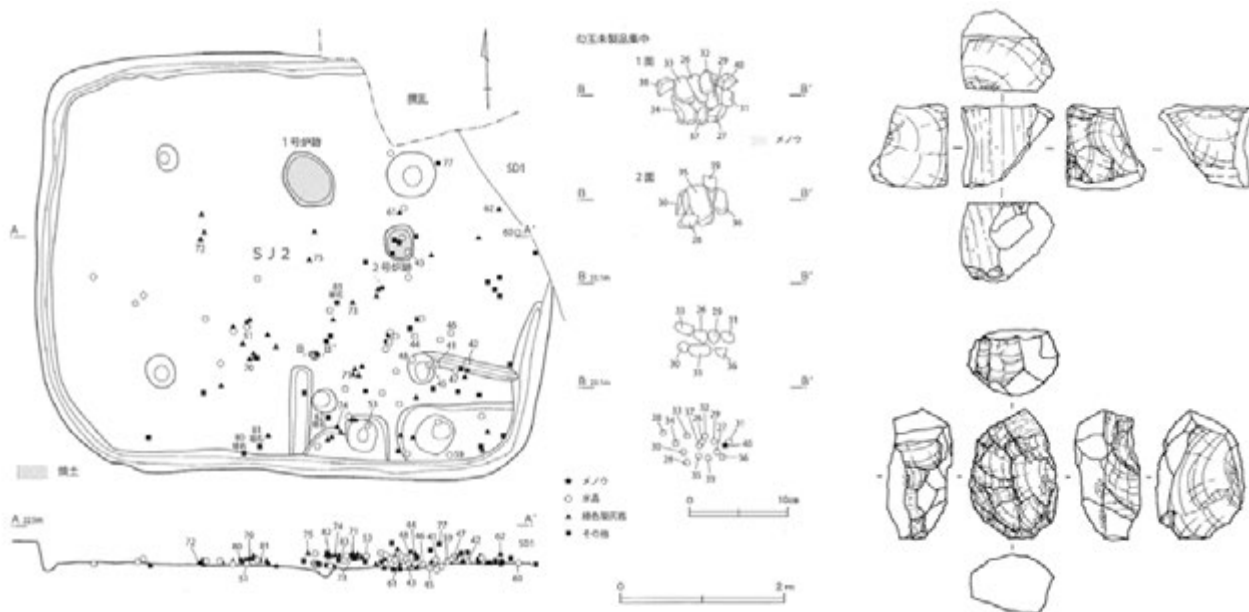


図4 前原遺跡の玉作り工房と未成品

(公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2010『前原遺跡』より引用)



図5 正直遺跡の緑色凝灰岩製石釧未成品と管玉未成品

(石岡憲雄 1980「北武蔵の玉作遺跡」『埼玉県立歴史資料館研究紀要第2号』より引用)

表1 葛袋で採取した石材の鉱物組成の分析結果

	主成分	他の成分
葛袋Aグループ	モルデン沸石	石英・オパールA
葛袋Bグループ	石英	モルデン沸石・オパールA
葛袋Cグループ	石英	斜プチロール沸石・オパールA
葛袋Dグループ	斜プチロール沸石	石英・モルデン沸石

表2 反町遺跡で出土した管玉未製品の分析結果

	色調	主成分	他の成分
反町Aグループ	灰緑色	石英	斜プチロール沸石
反町Bグループ	淡緑色	石英	モルデン沸石

表3 前原遺跡で出土した管玉未製品の分析結果

	色調	主成分	他の成分
前原遺跡	淡緑色	石英	モルデン沸石

表4 正直遺跡で出土した管玉未製品の分析結果

	色調	主成分	他の成分
正直Aグループ	濃緑色	石英	モルデン沸石
正直Bグループ	淡緑色	石英	緑泥石

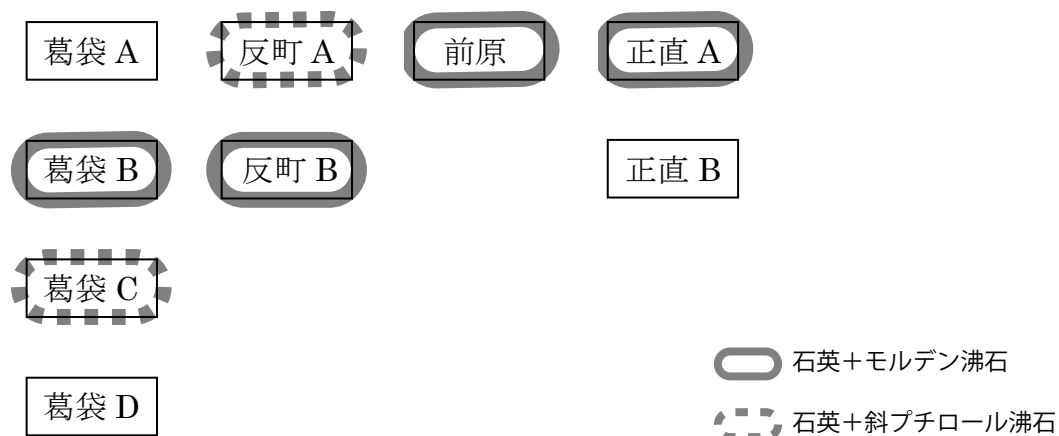


図6 鉱物組成から見た石材の関係性

石川県を中心としたコシの玉作り

石川県

(公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

伊藤 雅文)

1. はじめに

昭和33(1958)年から3次にわたって発掘調査がおこなわれた加賀市片山津玉造遺跡の報告書が昭和38(1963)年に大場磐雄と寺村光晴によって上梓⁽¹⁾され、戦後の玉作り考古学研究の第一歩を踏みだした⁽²⁾。ここでは管玉製作技法の解明や工場の把握に努力が払われ、その後の玉類研究の方向性がつけられた。また石劔などの碧玉未成品が多数出土し、石製品も同時に生産している状況が確認された。このように初めての本格的な玉作り遺跡発掘調査報告書であった。碧玉製品等の「宝器」が中央の政権から地方に配布されたという当時の研究状況にあって、「部民制」とどのようにかわるのか、古代史学に大きな問題を投げかけ、玉類の考古学研究の嚆矢となった。

2. 古墳時代以前の玉作り

コシにおける玉作りは弥生時代中期にはじまる。小松市八日市地方遺跡等の拠点的な大集落を中心として、碧玉管玉作りとともにヒスイ勾玉作りが盛んとなる。玉作りの端緒は山陰地方からの技術に求められるが、施溝分割技術の盛行により畿内周辺からの影響下にあった。最近の研究では、南加賀産碧玉が鳥取県に移入されていると指摘されている⁽³⁾。

弥生時代中期の生産は越前から佐渡、越後などの広範囲におよび、後期になってもその傾向は変わらない。ヒスイ製玉類の生産が拠点集落を中心に行われ、小規模集落における生産との違いはありそうだ。ヒスイが採取できる新潟県糸魚川市から富山県朝日町にかかる地域の玉作り遺跡は皆無で、ヒスイを移出する地域であったと位置づけできる。この点で縄文時代と大きく異なる。また、弥生時代中期の玉作りが石製工具を用いた施溝分割技術で作られるのに対し、後期は鉄製工具による打割によって作られて、技術体系が異なっているので、単純な技術の発展とは考え難い。しかも後期前半よりも後半および終末期に遺跡数が増加し、越前から加賀の北陸南西部に集中するようになる。

3. 古墳時代の玉作り(図1、表1)

コシの玉作り遺跡は弥生時代後期～終末期にその数がピークとなる。古墳時代前期には玉作り遺跡がほぼ越前・加賀の地域に限定され、管玉とともに碧玉(緑色凝灰岩を含む)製品の生産を行っていた。しかも、弥生時代から古墳時代に継続して玉作りを行う集落はないもの

の、古墳時代前期初頭まで遡る可能性はある。ヒスイ勾玉生産は不明確だが、碧玉管玉生産とともに碧玉の器物生産を同時に行っており、コシの玉作りの大きな画期となっている。

南加賀(手取川以南)にある片山津玉造遺跡では2号住居で連結ピット、4号住居屋内土坑から管玉未成品が一括出土した(図2・3、表2)。調査では40棟の竪穴建物を確認され、周辺に片山津成山遺跡や富塚遺跡・弓波遺跡などで石製品未成品が多数出土し、これらを集中して生産する地域であった。南加賀では小松市梯川下流域にも集中生産地域がある。ともに良質の碧玉を用いる。

これに対し北加賀では古墳時代前期中～後葉にかけて白山市浜竹松B遺跡で南加賀碧玉よりも軟質石材を用いた玉・石製品の生産が行われた⁽⁴⁾(図4、表3)。この地域の生産は金沢市藤江B遺跡など臨海低地部で盛んで、前期初頭まで遡る可能性が考えられるものの、掘立柱建物が主流となっているために玉作りの考古学的痕跡は見え難い。北加賀産石材を用いた玉・石生産とともに石劔生産の副産物である割貫円板が能登地域までの広範囲にわたって分布する状況は、地域を分散して生産したことを示す。

新潟県糸魚川市南押上遺跡では、ヒスイや碧玉勾玉とともに蛇紋岩・碧玉棗玉も製作する⁽⁵⁾(図5)。石材はヒスイや鉄石英、蛇紋岩など地元石材を基にしている。糸魚川市六反田南遺跡も同じ状況にあり、管玉以外の製品を主体に生産している。すなわち石製品と同様に特定種類を中心に生産する状況、つまり生産を分散した状況といえよう。

コシの玉作りは古墳時代前期でほぼ終息する。しかし、中期後半には富山県朝日町浜山遺跡でヒスイや滑石玉類の生産が行われた(図6)。火熱処理されたヒスイ原石を鉢巻状に敲打する浜山技法がある⁽⁶⁾。古墳時代後期には六反田南遺跡で滑石の玉生産が行われている。いずれも継続性が見られず、玉作りに昔日の面影はない。

註

- (1) 加賀市教育委員会1963『加賀片山津玉造遺跡の研究』
- (2) 寺村光晴1966『古代玉作の研究』
- (3) 鳥取県埋文センター2013『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9玉・玉作関連資料』
- (4) 松任市教育委員会1993『浜竹松B(竹松北)遺跡』
- (5) 新潟県教委他2011『南押上遺跡』
- (6) 富山県教育委員会1969『勾玉の故郷はまやま』

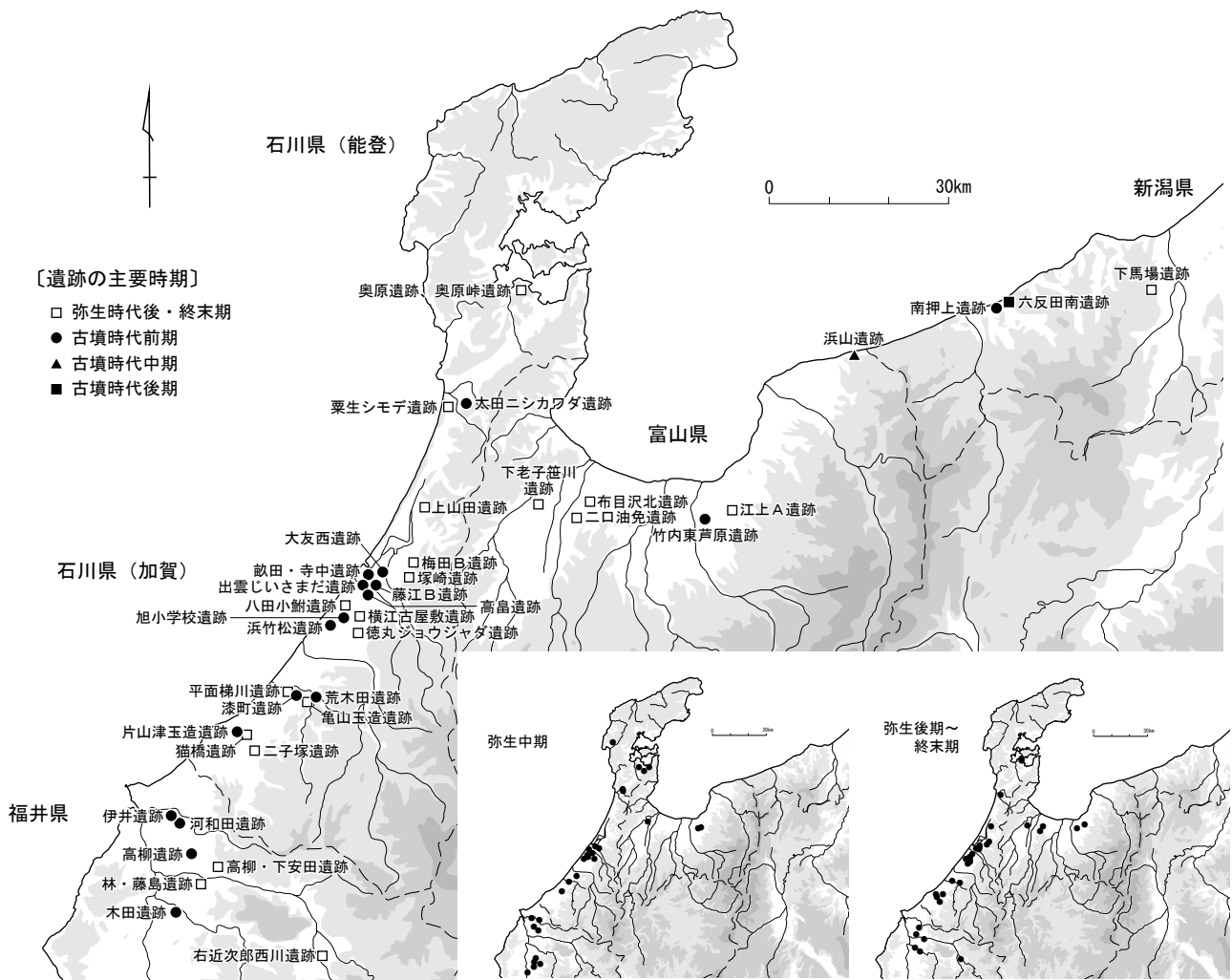


図1 北陸地域における古墳時代の主な玉作り遺跡

表1 主な玉作り遺跡の生産状況

遺跡名	所在地	遺構名	時代	原料										滑石				鉄製工具			磁石	備考								
				緑色凝灰岩	管玉	腕輪	管玉	管玉	ヒスイ	勾玉	その他	蛇紋岩	オパール	水晶	玉髓	玉髓	玉髓	玉髓	玉髓	玉髓			玉髓	玉髓	タガネ	鍬	穿孔具			
下老子笹川遺跡	富山県 高岡市	B3地区S15	弥生後期前半	●			○																			ガラス管玉共伴				
		B5地区S16	弥生後期前半	●			○																				ガラス小玉共伴			
		B5地区S17	弥生後期前半	○			○																				ガラス管玉・小玉共伴			
		B5地区S19	弥生後期前半	○			○																							
林・藤島遺跡	福井県 福井市	S101	弥生後期後半	●			○																				出土総量の3割弱占有			
		S111	弥生後期後半	●			○																				出土総量の4割占有			
江上A遺跡	富山県 上市町	S194	弥生後期後半	○			○																				鴨子形木製品共伴			
徳丸ショウジャ遺跡	石川県 羽咋市	竪穴建物1	弥生後期後半	○			○																				軽石製研磨具			
粟生シモデ遺跡	石川県 羽咋市	S101	弥生後期後半	○			○																				銅鏝1共伴			
下老子笹川遺跡	富山県 高岡市	B5地区S18	弥生後期後半	○			○																				磁石共伴			
		B5地区S110	弥生後期後半	●			○																							
		B6地区S121	弥生後期後半	●			○																							
塚崎遺跡	石川県 金沢市	第2号竪穴	弥生後期後半	○			○																					小型扁平片刃		
		第3号竪穴	弥生後期後半	○			○																					大型管玉		
		第5号竪穴	弥生後期後半	○			○																					ガラス製小玉共伴		
		第12号竪穴	弥生後期後半	○			○																							
高柳・下安田遺跡	福井県 坂井市	東地区L6区	弥生後期後半	○			○																					銅鏝破片、発泡土器共伴		
		S1001	弥生後期後半	○			○																					出土総量の2割占有		
		東地区M-N6区S8005	弥生終末	○			○																					出土総量の7割占有		
塚崎	石川県 金沢市	第21号竪穴	弥生終末	●			○																				出土総量の5割弱占有			
二子塚遺跡	石川県 加賀市	4号住居址	弥生終末	●			○																							
横江古屋敷遺跡	石川県 白山市	S1502	弥生終末	○			○																							
竹内東芦原遺跡	富山県 舟橋村	S104	古墳前期 (淡町6群)	○			○																							
井伊遺跡	福井県 あわら市		古墳前期	○	○		○																							
河和田遺跡	福井県 坂井市		古墳前期	○	○		○																							
片山津玉造遺跡	石川県 加賀市	1号住居址	古墳前期 (淡町9-7群)	○	○	?	○																							
		2号住居址	古墳前期 (淡町7群)	○	○		○																							
		3号住居址	古墳前期 (淡町7群)	○	○		○																							
		6号住居址	古墳前期 (淡町9群)	○	○		○																						複数の割り抜き円盤	
南押上遺跡	新潟県 糸魚川市	S101	古墳前期 (8-9群)	○			○																					● ガラス玉1		
		S102	古墳前期 (8-9群)	○			○																					○ ガラス玉1		
浜竹松B遺跡	石川県 白山市	S116・18	古墳前期 (淡町10群)	○	●		○																							
		S112	古墳中期 (淡町12群)	○			○																							
		S114	古墳中期 (淡町12群)	○			○																							
浜山遺跡	富山県 朝日町	第1工房址	古墳中期 (淡町13群)	○			○																							
六反田南遺跡	新潟県 糸魚川市	SD591	古墳前期	○			○																					平地建物周溝か		
		SN513	古墳前期	○			○																							
		SD605	古墳後期 (淡町15群)	○			○																						○ 榎木製小玉1、軽石製研磨具	

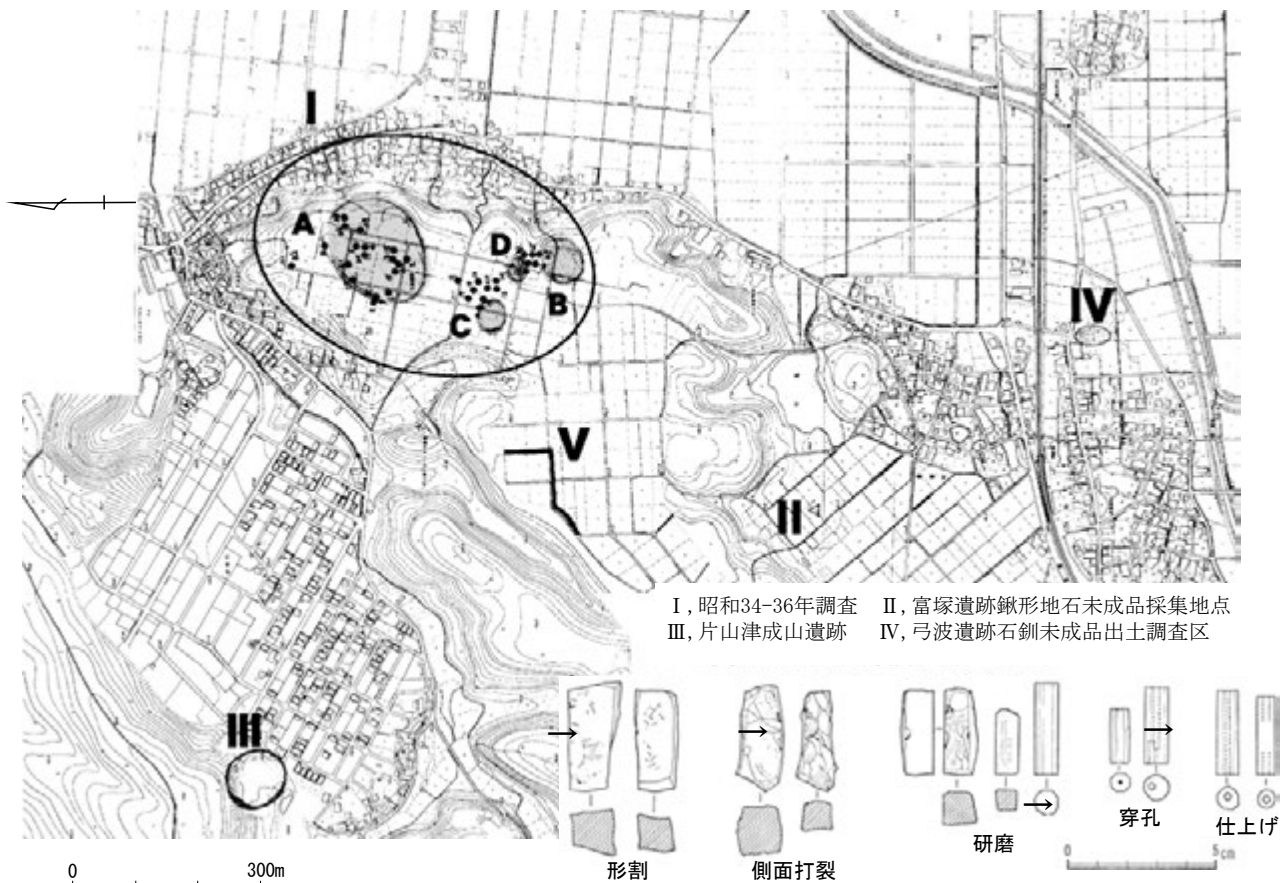


図2 片山津玉造遺跡と管玉製作工程（工程図は註2より）

表2 片山津玉造遺跡の玉類生産状況

	玉類						石製品										砥石					合計			
	管玉						勾玉	臼玉	ガラス玉	計	亀甲状	円板状	笠形状	方形状	鍬形石未成品	その他	計	筋砥石	板砥石	角砥石	丸棒砥石		その他	計	
	荒割	形割	側面打裂	研磨	穿孔	仕上げ																			
1号住居	1	8	1	2	1		1											1						3	17
2号住居	1	7			1				1						1			1						1	12
3号住居	1	9	1	2	5	12	1						2				2	1	2	1	1	2	7	40	
4号住居		83	7	4	2	3							2		1		6	1				1	2	107	
6号住居	2	17	11	20	2	14											3	1	1	1			3	72	
7号住居						1				1	5						5								6
9号住居																		1						1	2
3トレンチ	2	10	1																						13
9トレンチ		1	1																						2
他トレンチ																							1	1	1
表面採集							1	1	2	4								1	1				2	6	
計	7	135	22	28	12	30	3	1	3	241	8	3	2	2	1	1	17	6	4	3	3	4	20	278	

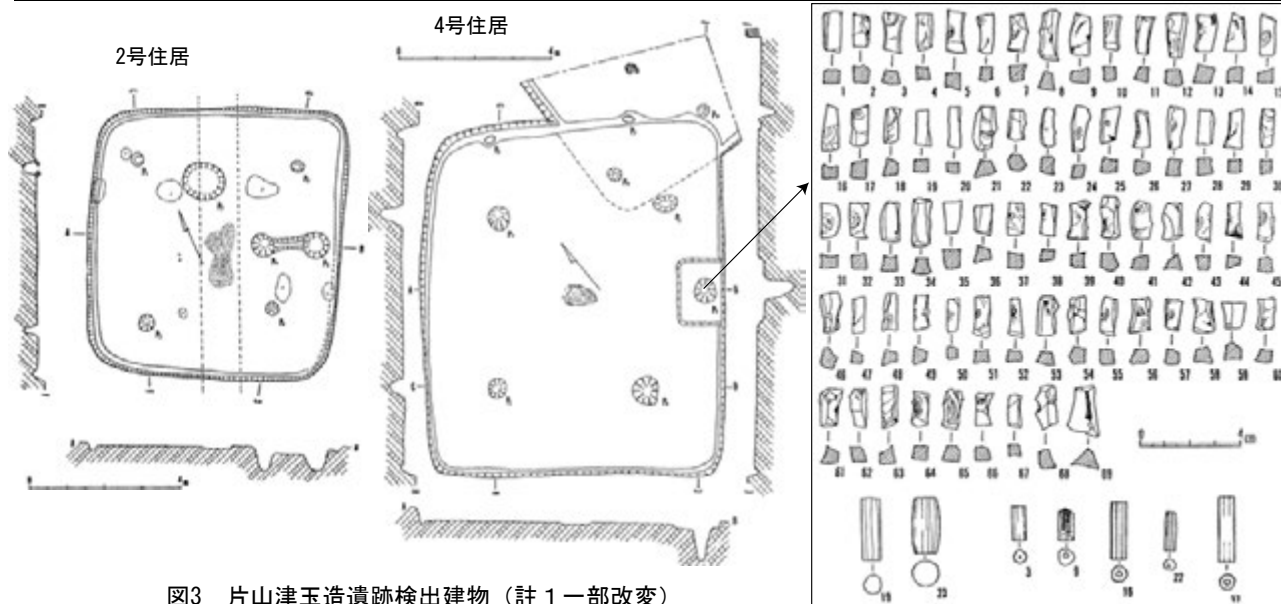


図3 片山津玉造遺跡検出建物（註1一部改変）

表3 浜竹松B遺跡の玉類生産状況

	玉類							腕飾					剥片	砥石	合計
	管玉							腕飾							
	形割(1)	形割(2)	形割(3)	研磨	穿孔	仕上げ	勾玉	計	形割	研磨	穿孔	仕上げ			
SI02							0		1			1	6	7	
SI03			1	1			2					0	10	12	
SI04		5	1				6	1		1		2	26	34	
SI05		2					2					0	4	6	
SI06			1				1					0		1	
SI08						1	1					0	1	2	
SI09	2	1	3			1	7					0	38	45	
SI10		2					2					0	7	9	
SI11	1		1				2					0	10	12	
SI12	4	3	4			2	13					0	75	88	
SI13							0					0	18	18	
SI14	1	1	3	1	1		7					0	57	64	
SI15		1					1					0		1	
SI16(SD07)		1	1				2	3				3	13	18	
SI17							0	1			1	2	18	20	
SI18(SD05)				1			1					0		1	
SK02							0					0	8	8	
SK05							0					0	1	1	
SK08							0					0	2	2	
SD06							0					0	7	7	
包含層	22	83	9	7	5	2	129	18	7	8	2	35	488	6	658
計	30	99	24	10	6	6	176	23	8	9	3	43	789	6	1014

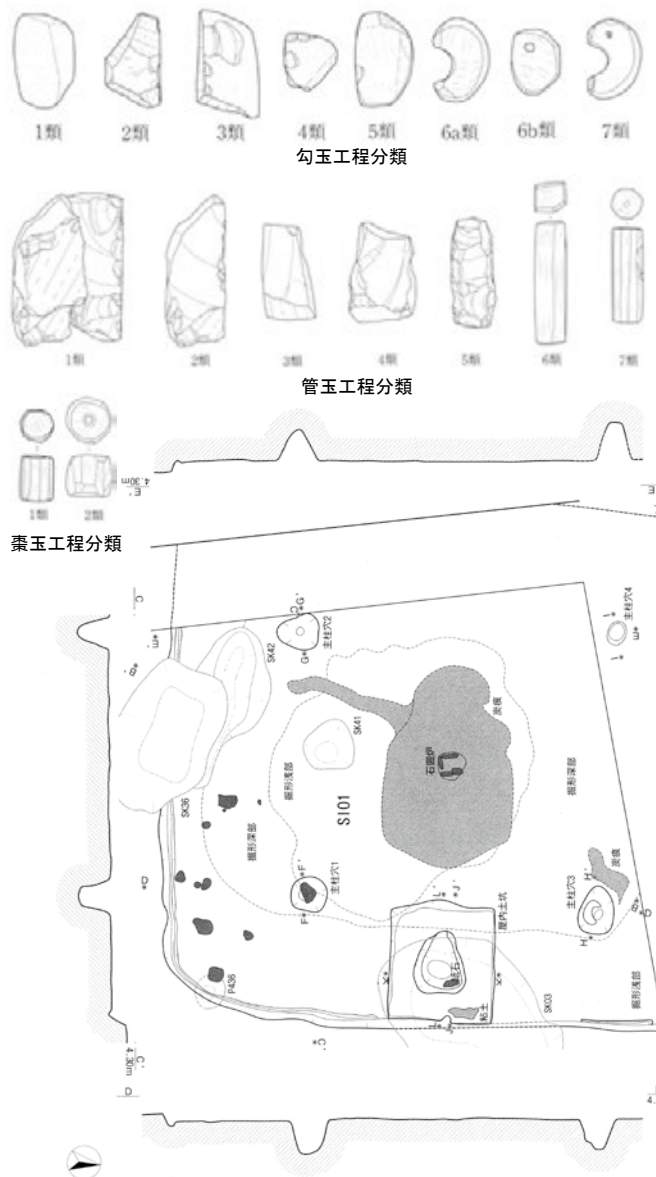


図5 南押上遺跡のSI101と玉工程分類(註5一部改変)



図4 浜竹松B遺跡の玉類等の製作(註4一部改変)

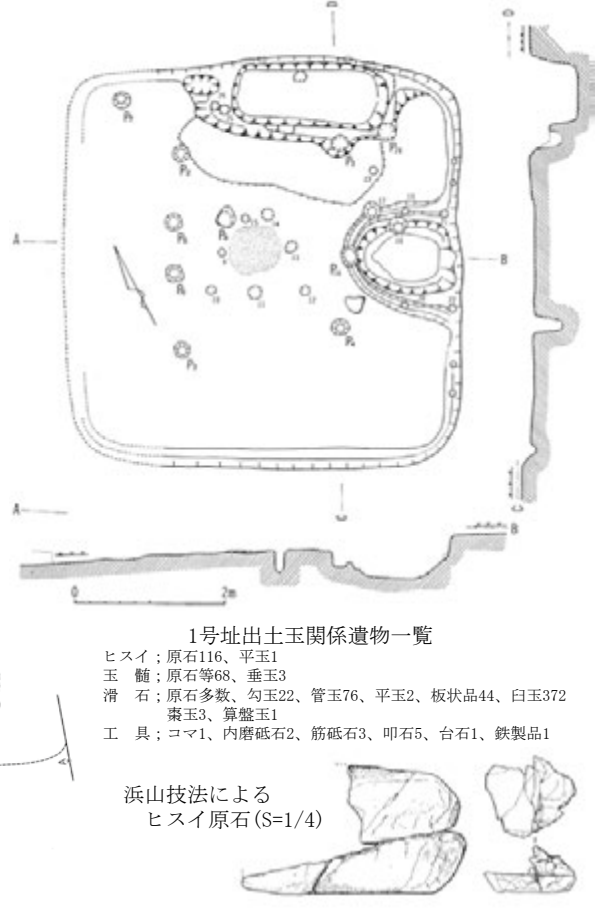


図6 浜山遺跡の1号址と出土ヒスイ原石(註6一部改変)

奈良県の玉作り－曾我遺跡を中心として－

奈良県

(奈良県立橿原考古学研究所 卜部 行弘)

1. 奈良県の玉作りの概観

奈良県における古墳時代の玉作り関連遺跡は、2015年現在で27遺跡を数える(図1・表1)。奈良盆地の東部から南部にかけて遺跡が分布しており、北部と西部、および中央部は希薄である。

玉作りはおおむね古墳時代前期中葉から開始される(上之庄遺跡、磯野北遺跡など)。これを遡るものとして纏向遺跡がある。同遺跡では玉作りのほかに、布留式古段階で北陸産の碧玉ないし緑色凝灰岩製の巴形石製品の未成品が出土しており、極めて早い段階で石製品を生産していた可能性がある。玉作りに用いられた石材は碧玉と滑石で、当初から碧玉を伴っていることは注目される。前期中葉および前期後半に玉作りを開始した遺跡は、前期のなかの比較的短期間で生産が終わる。

前期後半には曾我遺跡で玉作りが開始される。同時期の遺跡には九ノ坪・シマダ遺跡があり、続く前期末には布留遺跡、南郷遺跡群で生産が開始される。これらの遺跡は前代の遺跡に比べると操業期間が長く、中期後半ないしは後期前半まで続く。

曾我遺跡が生産の最盛期を迎える中期後半には、小路遺跡、秦楽寺遺跡などが生産を開始しており、奈良県の中で必ずしも曾我遺跡に一極集中するわけではない。曾我遺跡での生産が終わりを迎える後期前半以降には、ほかの遺跡も同調して生産を終え、奈良県における玉作りがほぼ終局を迎える。

玉の石材は各時期とも滑石と碧玉が主体で、水晶、メノウ、ヒスイ、コハクは曾我遺跡など数遺跡で極めて限定される。これらの石材は県内では全く産出せず、当然ながら原石を含めて原産地から直接もたらされたものである。

奈良県を含めた畿内の玉作り遺跡は、立地や性格の分析によって3種類ほどに類型化されている。列举すれば、①専門工房、②有力首長居館あるいは首長傘下での生産工房、③中小集落内での生産工房、である。奈良県内では①の曾我遺跡、②の布留遺跡や南郷遺跡群が発掘調査されており、政権膝下の直営工房や、有力首長による各種手工業生産の一分野としての玉作りの実態が判明している点の特徴である。

2. 曾我遺跡の玉作り

1) 概観 曾我遺跡は奈良盆地の南部、奈良県橿原市に所在する。遺跡の南側には忌部の地名が残り、忌部氏の祖神を祀る式内社天太玉神社が鎮座する。1981年から翌年にかけて調査され、南北330mの規模を有する玉作り専門集落であることが判明した。調査区はA、B、C₁、C₂、Dの5地区(図2)に分けられて

いるが、北端のA地区を除く4地区から夥しい量の製品、未成品、剥片、原石、工具が出土しており、これらの遺物の総重量は約2.7t、総数は820万点にも及ぶ。

2) 石材 各地区の使用石材をみると、比率の違いが認められ、遺跡内で分業体制が敷かれていた可能性や原石供給元が変化した可能性がある。主な使用石材は、滑石、碧玉、緑色凝灰岩、メノウ、水晶、片岩、ヒスイ、コハク、埋れ木で、その他に土、ガラスがある。このうち滑石および片岩で全体の約75%、碧玉と緑色凝灰岩で25%弱を占めている。

3) 製品 曾我遺跡で生産された主たる製品は滑石製白玉で、全体の約88%を占める。滑石は白玉のほかに勾玉、管玉、模造品の製作にも充てられており、汎用性が高い。碧玉と緑色凝灰岩の使用はほぼ管玉に限られており、勾玉には滑石のほかは少量のコハク、ヒスイが使用されるだけである。

4) 遺構 遺構には土坑、落ち込み、池沼、流路がある。一般的な玉作り遺跡で見られる住居址は検出されておらず、露天で操業していたとみられる。また、湧水や導水によって土坑に水を溜め、形割に際しては原石を水に浸して軟化を図ったものとみられる。

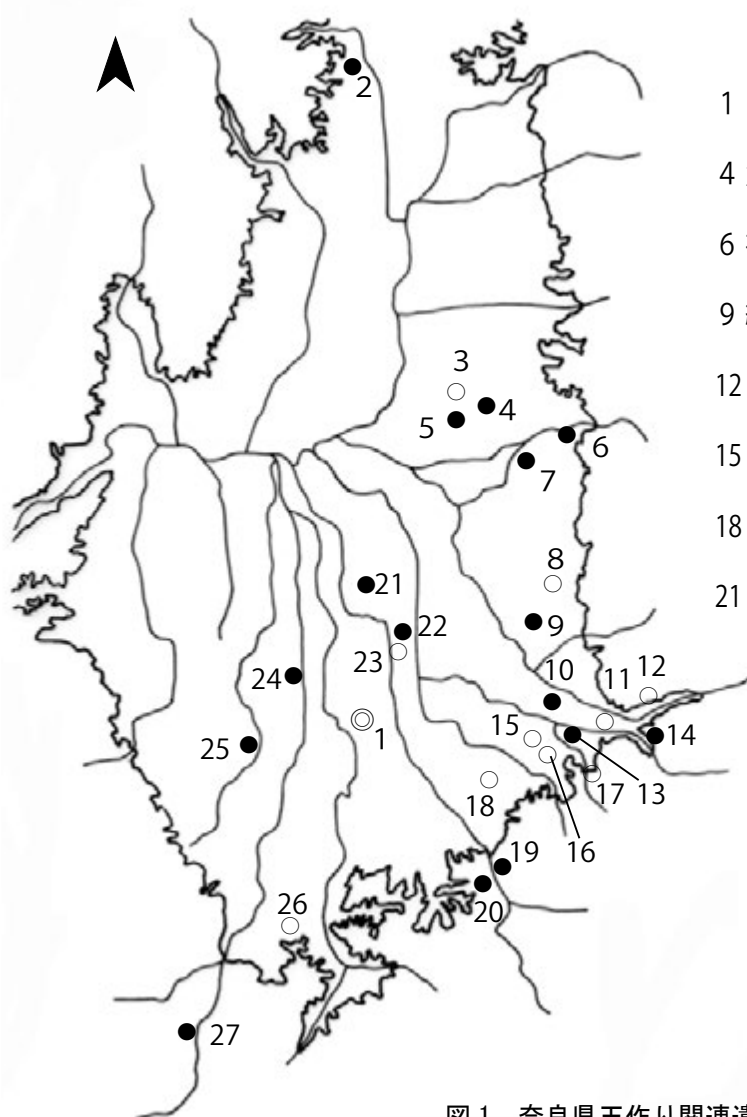
5) 生産の変遷 曾我遺跡で玉生産が開始されるのは、前期後半である。C₂地区のSK163(写真1・図3)、D地区のSK70などで、滑石、碧玉A(花仙山産)、碧玉B(非出雲産)、緑色凝灰岩、片岩の製品、未成品が出土している。ただし、滑石を主体とした少量の出土で、全体量からすれば、中小集落内での玉生産と変り映えがしない。

中期前半にはC₂地区、D地区において同じ傾向で生産が続く。石材にはコハクが新たに加わる。

期中葉になると石材に水晶、メノウ、ヒスイなどが加わり(写真5・6)、曾我遺跡における玉生産の全容が整う(図4・5)。この時期の遺構からは、碧玉の円錐形チップ(へそ石)が出土しており、この段階において、出雲系技法である片面穿孔による碧玉製管玉生産(写真3)が開始されたとみられる。へそ石は碧玉Aが大部分を占めるが、両面穿孔を主体とする碧玉Bにも一部認められる。また、碧玉Aのへそ石のサイズには大小があり、粗く加工した段階で穿孔するものと、側面を磨いておおよその形にした段階で穿孔するものの違いを示している(写真4)。

中期後半には玉類の出土量だけでなく、遺構の数も増加しており、生産の最盛期を迎える(写真2)。この時期はD地区が生産の中心となって集約化が図られている。そして後期に入っても、B地区を中心に大規模生産が継続するが(図6)、後期中葉頃になると急激に生産が縮小され、遺跡自体の終焉を迎える。

【奈良県玉作り関連遺跡】



- 1 曾我遺跡 2 菅原東遺跡 3 小路遺跡しょうじ
 - 4 九ノ坪・シマダ遺跡 5 平等坊・岩室遺跡
 - 6 布留遺跡ふる 7 田町遺跡 8 向山遺跡
 - 9 纏向遺跡まきむく 10 上之庄遺跡 11 城島遺跡しきしま
 - 12 脇本遺跡 13 谷遺跡 14 忍坂遺跡おっさか
 - 15 吉備遺跡 16 阿部・六ノ坪遺跡 17 河西遺跡
 - 18 藤原宮跡 19 飛鳥京跡 20 橘寺
 - 21 十六面・薬王寺遺跡じゅうろくせん やくおうじ 22 秦楽寺遺跡しんらくじ 23 多遺跡おお
 - 24 藤森東遺跡 25 磯野北遺跡
 - 26 秋津遺跡 27 南郷遺跡群
- (○は玉作り遺跡の可能性のあるもの)

図1 奈良県玉作り関連遺跡の分布

遺跡名	所在地	前期			中期			後期			石材							
		3世紀	前葉	4世紀 中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	6世紀 中葉	後葉	碧玉	緑色凝灰	滑石類	コハク	水晶	メノウ	ヒスイ
纏向	桜井市	■										○						
上之庄	桜井市			■									○					
向山	天理市			■									○					
磯野北	大和高田市			■									○					
菅原東	奈良市			■	■								○					
十六面・薬王寺	田原本町				■								○	○	○			
九ノ坪・シマダ	天理市				■								○	○	○			
曾我	橿原市				■								○	○	○		○	○
南郷遺跡群	御所市				■								○	○	○		○	○
布留	天理市				■								○	○	○			
小路	天理市				■								○	○	○			
秦楽寺	田原本町				■								○	○	○		○	○
田町	天理市				■								○	○	○			
飛鳥京跡	明日香村				■								○	○	○			
脇本	桜井市				■								○	○	○			
藤森東	大和高田市				■								○	○	○			
阿部・六ノ坪	桜井市				■								○	○	○			
忍坂	桜井市				■								○	○	○			
谷	桜井市				■								○	○	○		○	○
橘寺	明日香村				■								○	○	○		○	○
秋津	御所市				■								○	○	○			
城島	桜井市				■								○	○	○			
平等坊・岩室	天理市				■								○	○	○			○
河西	桜井市				■								○	○	○			
藤原宮跡	橿原市				■								○	○	○			
吉備	桜井市				■								○	○	○			
多	田原本町				■								○	○	○			

表1 奈良県玉作り関連遺跡の消長

【曾我遺跡 各地区の中心時期】

- ①C₂ 地区 古墳時代前期後半～中期前半
(滑石多い)
- ②・③C₁ 地区 古墳時代中期後半～後期前半
- ②・③D 地区 古墳時代中期後半～後期前半
(滑石>碧玉)
- ③B 地区 古墳時代後期前半
(碧玉多い)

玉作りの最盛期は5世紀後半



図2 曾我遺跡 調査区配置図
(北からA・B・C₁・C₂・D地区)



写真1 C₂地区 SK-163 遺構写真

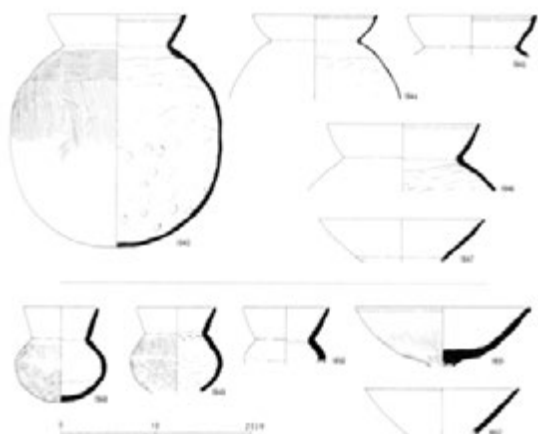


図3 C₂地区 SK-163(上)・SK-166(下) 出土遺物
(古墳時代前期後半～中期初め頃)



写真2 D地区 SK-300 遺構写真
(古墳時代中期中葉～後半)

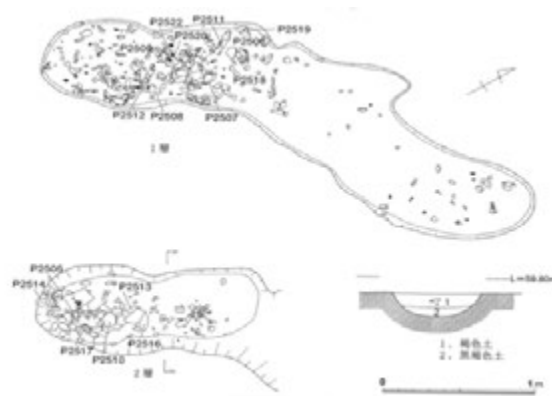


図4 D地区 SK-342 遺構平面図

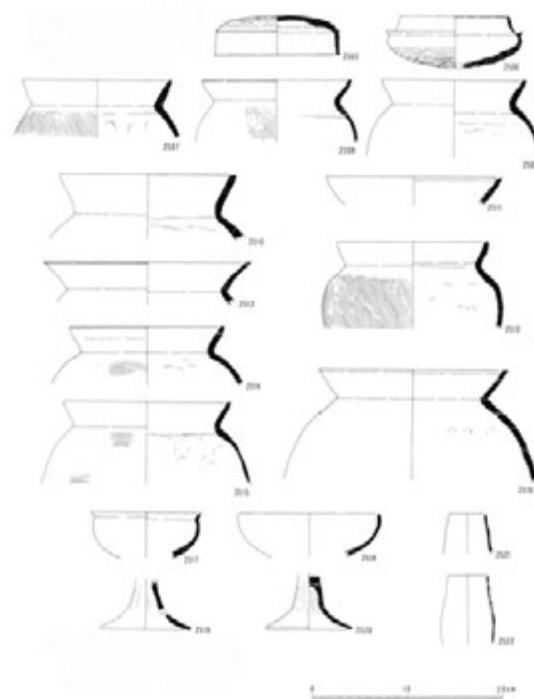


図5 D地区 SK-342 出土土器
(古墳時代中期中葉頃)

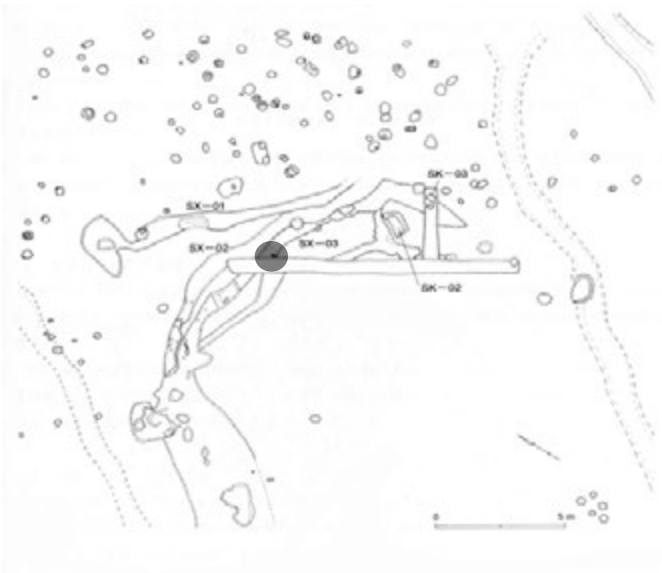


図6 B地区 玉作り関連遺構（古墳時代後期前半）

SX-03からは、多量の緑色凝灰岩剥片ほか、数点の碧玉の剥片や緑色凝灰岩管玉未成品が出土している。



写真3 碧玉製管玉の製作工程をあらわす資料

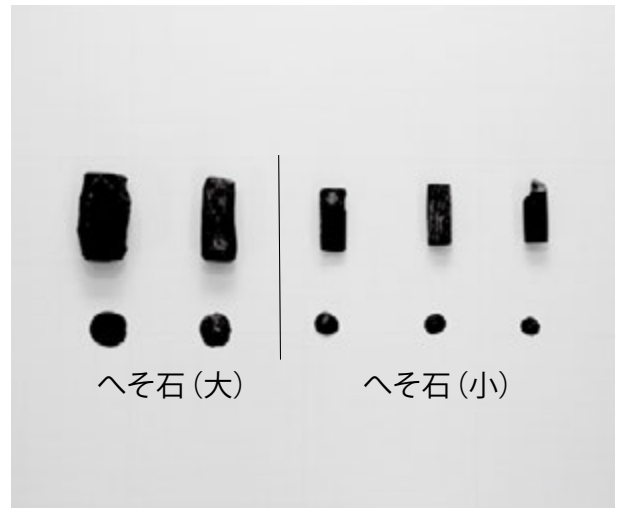


写真4 碧玉A製管玉の未成品とへそ石（大・小）



写真5 水晶の剥片および未成品

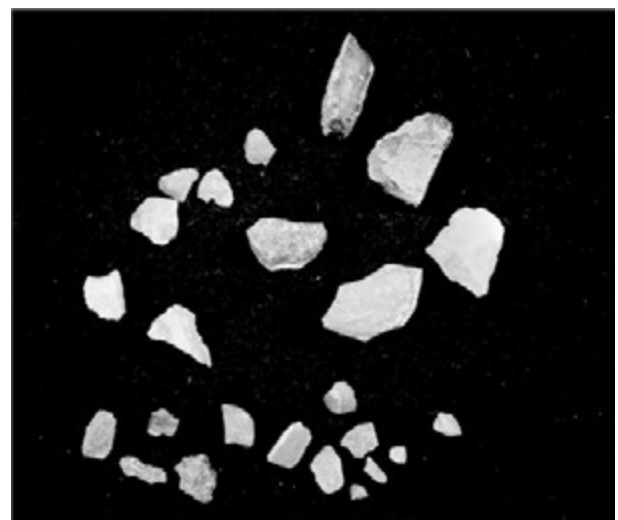


写真6 メノウの剥片

（図2～6、写真1・2は奈良県立橿原考古学研究所 1989『曾我遺跡遺構・土器編』より引用・図6は一部改変）

鳥取県の玉作り遺跡概観

鳥取県

(公益財団法人 鳥取県教育文化財団調査室 小山 浩和)

1. はじめに

鳥取県は、県中部の長瀬高浜遺跡（湯梨浜町）において、列島内で逸早く弥生時代の玉作りが開始され、これ以後玉作りが盛行した地域である。ここでは弥生時代に遡り、代表的な遺跡を取り上げながら、鳥取県の玉作りを概観していきたい（図1・表1）。

2. 弥生時代中期までの玉作り

鳥取県東部に位置する青谷上寺地遺跡は、入江に面した弥生時代前期末から古墳時代前期にかけての集落跡である。出土品の中には、木製高杯等の優れた造形美を示すものがある。また、多量の出土品の中には、石器や木器、骨角器等の未成品があり、集落内でさまざまなものづくりが行われたことを示す。

玉作りも多様なものづくりの一環として行われていた。これまでの研究で、石川県小松市周辺で産出する碧玉を素材とした管玉生産の実態が明らかとなっている。原石の分割は、結晶片岩製の石鋸を用いて浅い擦り切り溝を施し、打撃を加え分割を行い（施溝分割技法）、管玉1個体分の直方体を作出する。穿孔具は石針を用いて、管玉の両端から穿孔を行う（両面穿孔）等、弥生時代中期の管玉作りの特徴を示す（図5上）。

3. 弥生時代後期の玉作り

鳥取県西部に位置する妻木晩田遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期の集落跡である（図2）。集落内では、碧玉製管玉作りのほか、裁断した鉄片等が多く出土することから、鉄器加工を行ったことが明らかとなっている。青谷上寺地遺跡と同様に多様なものづくりが行われていた。

松尾頭地区にて弥生時代終末期の玉作り工房が1棟見つかっている（図3）。これまで遺跡全体で400棟を超える竪穴建物が見つかっているが、玉作り関連遺構・遺物は僅少である。このため生産規模は小さく、生産期間も短かったとみてよい。

青谷上寺地遺跡出土の管玉未成品とは製作技法が異なり、原石の分割を施溝分割ではなく、打撃分割のみで行う（打撃分割技法）。また、穿孔は鉄針で両面から穿孔を行う等、弥生時代後期から古墳時代に特徴的な技法へと変化している（図5下）。また管玉の素材となる碧玉の流入経路にも変化があり、中期に流入した北陸系の石材が減少する一方、古墳時代に主流となる鳥根県花仙山産の碧玉の流入が徐々に増すこと

が、他の遺跡の事例から明らかとなっている。このように古墳時代の玉作りは、素材や分割技法、穿孔具といった要素からみて、その淵源が弥生時代後期まで遡るといえよう。

4. 鳥取県の古墳時代の玉作り

ところが古墳時代前～中期になると、様相が一変して、鳥取県内では玉作り遺跡として確証が得られる遺跡は皆無となる。

鳥取県内の古墳時代の玉作り遺跡としては、米子市淀江の百塚第1遺跡が唯一の例である（図4）。近隣には中期から後期の首長墓が築かれた向山古墳群が存在する。調査により古墳時代後期初頭の玉作り工房が1棟検出され、碧玉、水晶、メノウ製玉類を製作する等、出雲の玉作りとの共通性が窺える。

古墳時代前・中期の中断を挟んで再び小規模な玉生産が行われた背景には、鳥取県西部の首長膝下の集団と出雲との深い関わりが窺える。

このようなことから弥生時代の鳥取県では、他の日本海沿岸地域と同様に主要な玉生産の一部を担う存在であった。古墳時代へ移行すると、一部で玉の小規模生産を行うものの、主たる生産地とはなり得ず、おおむね玉の生産地から消費地へと転換したことが特徴的といえる。

5. 弥生時代の玉作り遺跡のまとめ

最後に古墳時代の玉作りとの比較のため、弥生時代の玉作りの状況を鳥取県の事例を元に整理しておきたい。

- ① 原産地が限定される碧玉や石鋸の素材となる結晶片岩が、広域に流通するとともに、玉作り遺跡は広範囲に分布する。
- ② 遺跡に持ち込まれた碧玉の総重量は、比較的出土量が多い青谷上寺地遺跡でも約7.5kgと10kgに満たず、また出土量が僅少な遺跡も多いため、生産規模は概して小規模といえる。
- ③ 鳥取県中部の西高江遺跡（北栄町）では玉作り工房が複数棟見つかるとともに、比較的専門度の高い玉作りを行った状況が窺える。しかし、こうした遺跡は稀であり、大部分の玉作り遺跡は一般集落に近いあり方を示す。また、併せて木器や石器、鉄器作りなどさまざまなものづくりが行われたことが明らかなることから、玉作りもこうした多様なものづくりの一環として行われた状況が窺える。

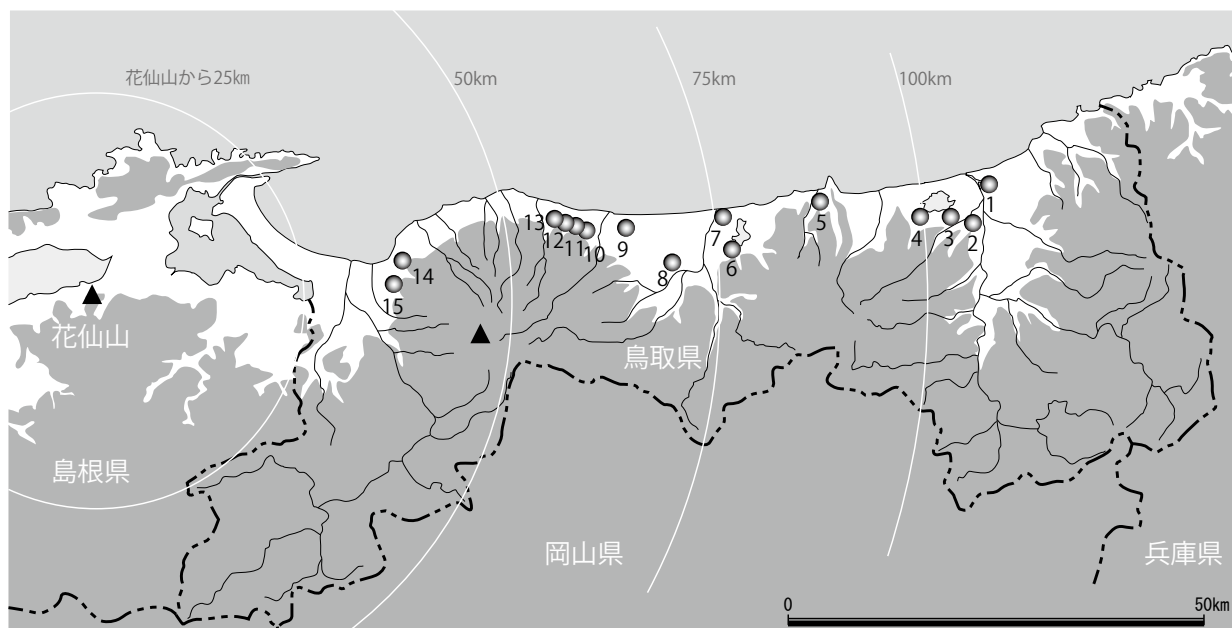
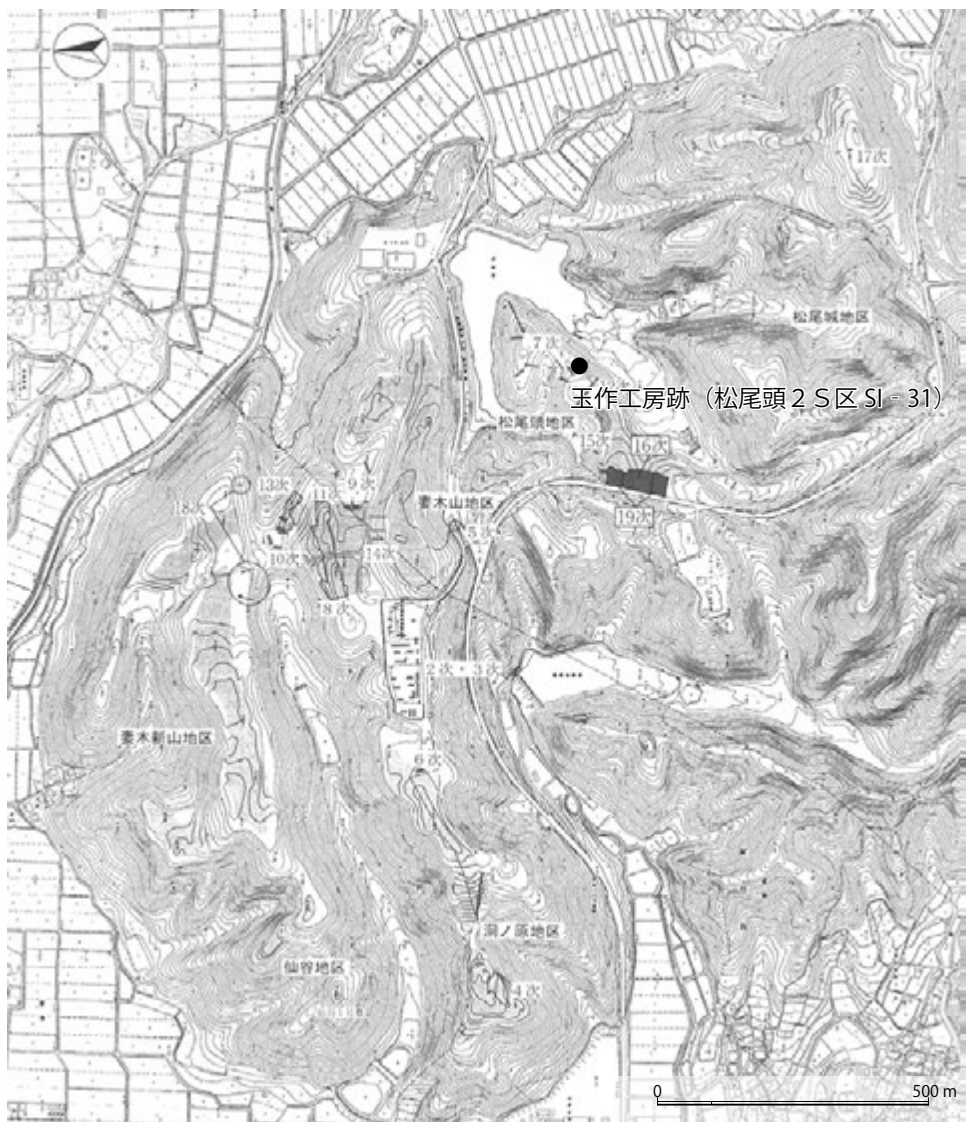


図1 鳥取県の主要な玉作り遺跡の分布

No.	遺跡名	弥生時代			古墳時代			備考
		前期	中期	後期	前期	中期	後期	
1	秋里遺跡(鳥取市)							
2	山ヶ鼻遺跡(鳥取市)							
3	布勢第2遺跡(鳥取市)							
4	松原田中遺跡(鳥取市)							
5	青谷上寺地遺跡(鳥取市)							
6	宮内長谷遺跡(湯梨浜町)							
7	長瀬高浜遺跡(湯梨浜町)							
8	東前遺跡(倉吉市)							
9	西高江遺跡(北栄町)							主に水晶製玉類を生産
10	笠見第3遺跡(琴浦町)							花仙山産碧玉を搬入
11	久蔵峰北遺跡(琴浦町)							花仙山産碧玉を搬入
12	南原千軒遺跡(琴浦町)							管玉、ヒスイ勾玉を生産
13	梅田萱峰遺跡(琴浦町)							
14	妻木晩田遺跡(米子市・大山町)							
15	百塚第1遺跡(米子市)							

・掲載した遺跡は、工房跡や玉作り関連遺物が一定量認められるなどの、遺跡内で玉生産を行った確度の高い遺跡を掲載した。
 ・表中の遺跡番号は、玉作り遺跡の分布図の番号と対応する。
 ・表中の網掛けは、出土した玉作り関連遺物等から推定した、玉生産が行われた時期を示すものであるが、いずれも生産期間は比較的短く、生産の時期幅を示すものではない。

表1 鳥取県の主要な玉作り遺跡一覧表



(鳥取県教育委員会 2008 『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書』に一部加筆)

図2 妻木晩田遺跡全体図



(大山町教育委員会ほか 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ(松尾頭地区)』より)

図3 妻木晩田遺跡の玉作り工房跡と出土した管玉未成品

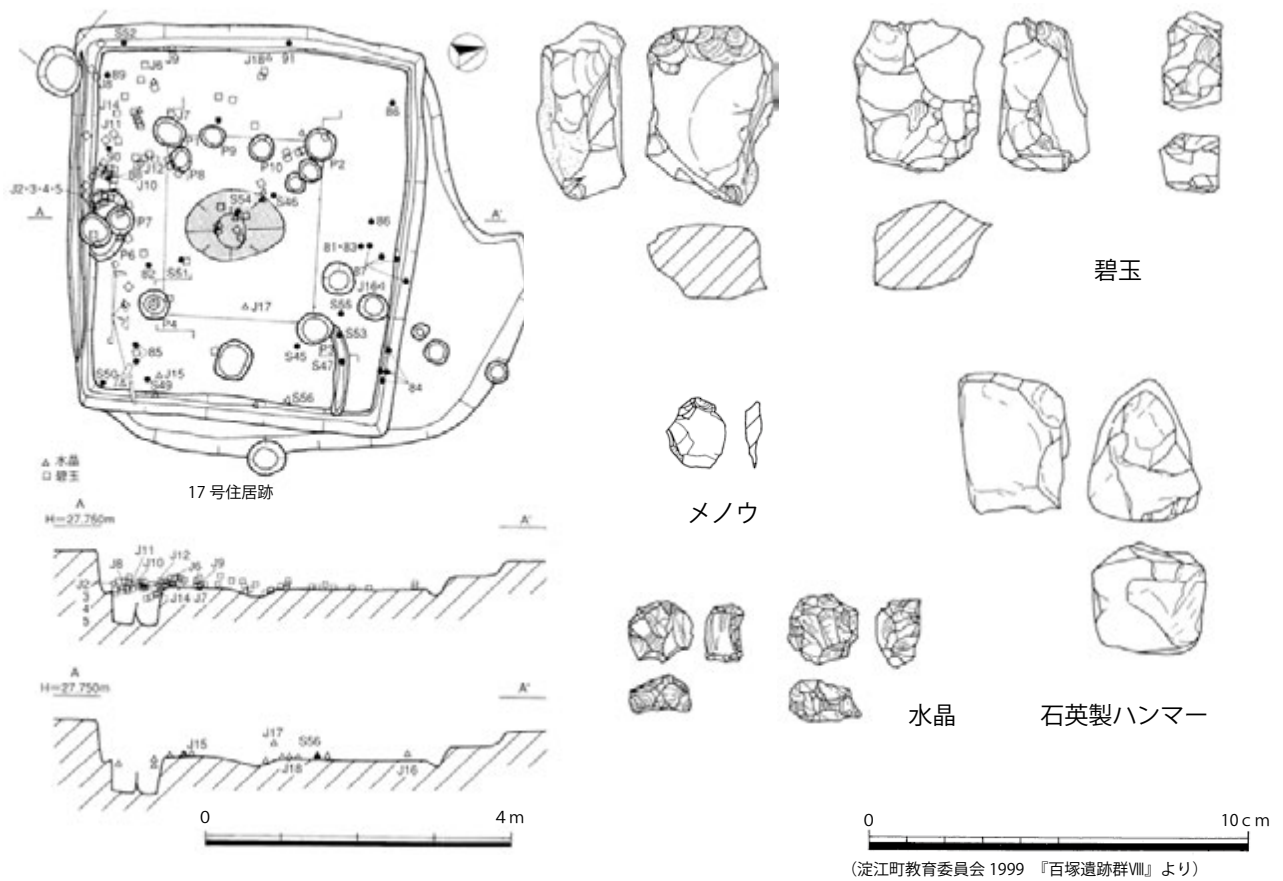
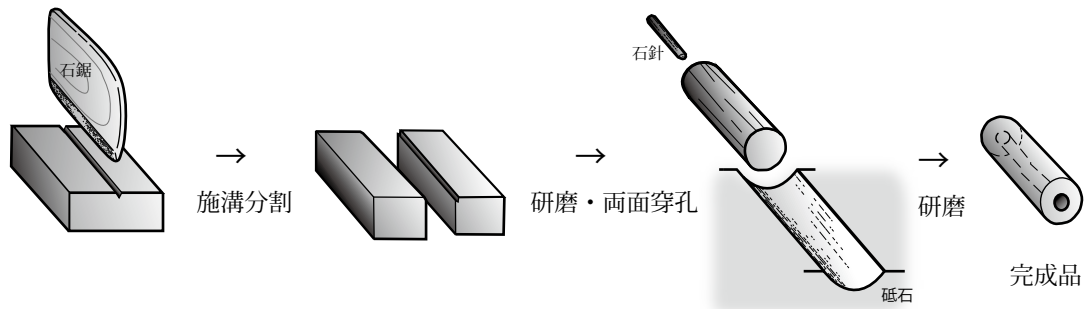


図4 百塚第1遺跡の玉作り工房と玉の未成品

弥生時代中期以前（施溝分割技法）



弥生時代後期から古墳時代（打撃分割技法）

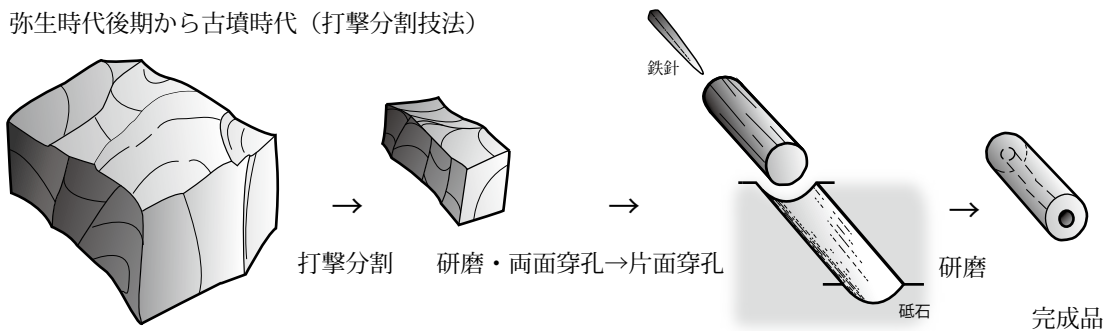


図5 管玉の作り方の変化

島根県（古代出雲）の玉作り

島根県

(島根県教育庁文化財課古代文化センター 岩橋 孝典)

1. はじめに

島根県は、律令制下の旧国の出雲国、石見国、隠岐国の三国が含まれる。その内、「出雲ブランド」と言えるほど古代の玉生産で名を馳せたのは「出雲国」に相当する地域である。

出雲地域の玉作りは、弥生時代前期後半に松江市・西川津遺跡などで緑色凝灰岩を用いた管玉作りが開始されたことが初現である(図1)。弥生時代前・中期の玉作りでは、比較的柔らかい石材の緑色凝灰岩を用いる。石鋸を使って素材の石に擦り目を入れ、その溝に沿って素材石を打ち割っていく技法で、石材を細長い長方形に加工する。その後、石錐で穴を開けて、角柱の角を研ぎ落して円柱状の管玉に仕上げる(図5)。

この技法は、柔らかい石材に適した技法であり、北陸・近畿地方の玉製作技術にも影響を与えている。しかし、「出雲ブランド」の代名詞である碧玉・メノウ・水晶という堅い石材を加工するにはさらなる技術革新を必要とするのである。

2. 弥生時代後期～古墳時代前期まで

弥生時代後期から玉作りにも鉄の道具が導入された(図6)。一つは穴を開けるための鉄製の錐(針)の登場。また、石材を製品の形に近づける打割のための鉄製ノミの導入も画期的であった。鉄の道具の導入により、今までは加工が難しかった花仙山(松江市玉湯町)で産出する碧玉、メノウ等の硬い石材の加工が可能になったことは重要である(図2)。

古墳時代に入ると出雲地域では、碧玉製管玉などが生産されたほか、鏃形・合子形などの石製祭具も生産された形跡があるが、その生産内容は今一つ判然としない。

古墳時代前期後半になると出雲玉作りの一大画期が訪れる。それまでの主力生産品である碧玉管玉に加えて、メノウ、碧玉、水晶の勾玉生産を開始した(図3)。

この時期に生産されたメノウ、水晶、碧玉の勾玉は加工や仕上げが極めて丁寧で、「玉」という名に相応しい美しいものが多い。これらの玉は、畿内の主要古墳で出土しているほか、全国各地の主要古墳からも出土している。

また、出雲大社境内遺跡でメノウ製勾玉、滑石製白玉を用いた祭祀が行われていることは特筆される。

3. 出雲玉作りの画期－古墳時代中期－

古墳時代前期末～中期にかけて、奈良盆地の南部に成立した玉類生産の一大工房「曾我遺跡」には、出雲

花仙山産の碧玉やメノウ素材が搬入されて、現地で生産を行っている。

曾我遺跡には、出雲地域ばかりではなく、北陸地域の緑色凝灰岩や紀伊の滑石、砥石用の結晶片岩は関東や紀伊から運ばれている。全国から玉の素材となる石材や技術工人などを招聘して畿内政権が祭祀などで使用する玉類を生産する工房を奈良盆地内に設置したものと考えられている。

この「曾我」工房では、短く太い管玉＝古墳時代中期末以降のタイプ(片側穿孔)が成立したほか、砥石に結晶片岩を使用する技術も完成した。この技術の完成には出雲の玉作り工人も大いにかかわった可能性があり、その後、出雲地域の玉作り遺跡では、片側穿孔で太く短い管玉が生産され、遠く紀伊・阿波地域で産出する結晶片岩が砥石用に持ち込まれた(図7)。

特に「片側穿孔」された管玉、勾玉は「出雲ブランド」を識別する際の重要な手がかりとなるのである(図4)。

4. 大量生産から衰退へ

古墳時代後期は、他の玉生産地が衰退・廃絶する中、出雲では寡占状態で大量の玉生産を行うこととなる(図4)。

しかし、この時期に生産される玉類は、大量生産につきものの「粗製濫造」となっていく。古墳時代前期の勾玉にみられたような執拗なまでの仕上げ研磨は既に無く、表面の一部には研ぎ残しの粗い面を残すものも多い。

また、勾玉の形態が頭部と尾部の差が明瞭な「C」字形から上下対称の「コ」字形になるなど、形骸化も進む。

5. 奈良時代の復活

7世紀半ばに生産を休止した出雲玉作りであるが、700年前後にはその生産を再開したらしい。天平五(733)に編纂された『出雲国風土記』には、意宇郡忌部神戸条の記載に「出雲国造が神吉詞を唱えに朝廷に参上する時に、潔斎に用いる清浄な忌玉を作る地」とある。

このように、古墳時代的な玉生産から脱却し、出雲国造から朝廷に貢納するための玉生産に内容が変質するものの出雲の玉作りが復活することの意義は大きい。

出雲地域の玉作りの伝統は、平安時代後期には途絶えるとされるが、江戸幕末に地元湯町の伊藤氏が若狭国より技術を伝習して復活している。

表1 古墳時代の玉類の主な原材料（石材）

※モース硬度による。硬度10のダイヤモンドが最も硬く、数字が小さくなるに従って軟質になる。

名称	色	※硬度	鉱物・岩石学的特徴
ヒスイ(翡翠) Jadeite	緑色～ 緑白色	6.5～7	ヒスイ輝石を主成分とする岩石で、蛇紋岩中に産出する。非常に硬く割れにくいことから「硬玉」とも呼ばれる。新潟県糸魚川の産地が有名。縄文時代の太珠や縄文～古墳時代の勾玉に使われる。
緑色凝灰岩 Tuff	淡緑色	—	火山灰などの軟質で多孔質な物質が堆積して固まった岩石。このうち緑色系のものはグリーンタフと呼ばれ、日本海沿岸に広く分布する。弥生時代以降は管玉、古墳時代には腕輪型石製品に使用される
碧玉 Jasper	濃緑色 ほか	7	非常に細かい結晶性の石英の一種で、多量の酸化鉄を含んでいて、塊状・不透明なもの。主に弥生時代以降の管玉や、古墳時代の勾玉、丸玉、算盤玉、平玉に使用される。
メノウ(瑪瑙) Agate	赤橙色・白色 ほか	7	碧玉と同様、非常に細かい結晶性の石英の一種。このうち顕著な縞模様をもち、半透明～不透明なものを瑪瑙という。主に弥生時代の穿孔具や、古墳時代の勾玉に使用される。
水晶 Rock crystal	無色・透明	7	石英のうち、無色透明なものを指す。化学組成は、SiO ₂ (珪酸)で、碧玉や瑪瑙と同じである。弥生時代以降の算盤玉、古墳時代の勾玉や丸玉、切子玉によく使用される。
滑石 Talc	灰色・白色 ほか	1	主にマグネシウムと珪素からなる。外観は不透明で、非常に軟らかい性質を持つ。考古学でいう「滑石」は、鉱物学上の滑石、蛇紋岩、蠟石、泥岩、頁岩、緑泥片岩などの灰色系で軟質な石の通称である。古墳時代の勾玉、臼玉、模造品に使用される。
琥珀 Amber	黄色・赤褐色	2～2.5	主として針葉樹の樹液が化石になったもの。玉の材料となる琥珀は、岩手県久慈、千葉県銚子、岐阜県瑞浪などで産出したもの。主に縄文時代の玉、古墳時代以降の勾玉、霰玉、奈良時代の平玉、小玉に使用される。

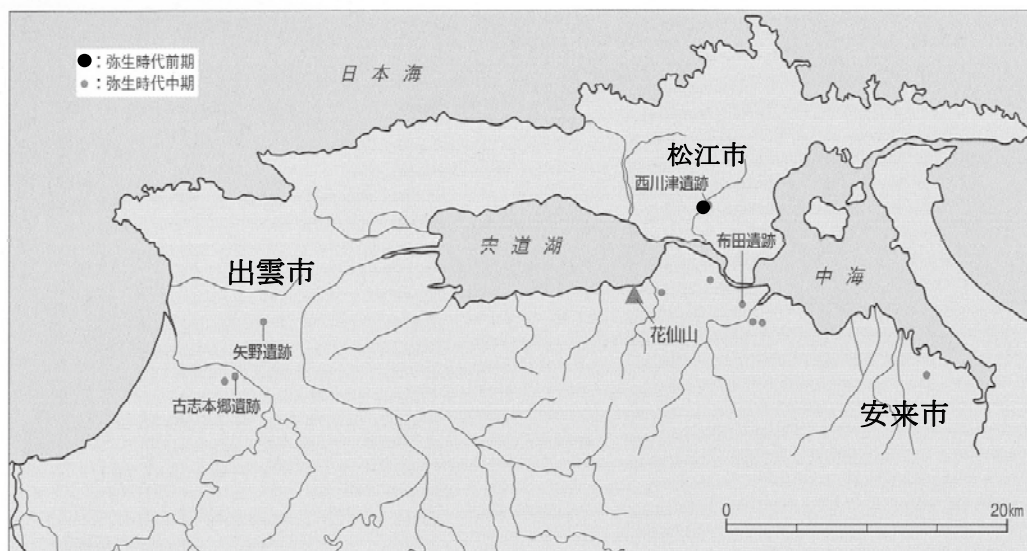


図1 弥生時代前～中期の玉作り遺跡【島根県東部】

前期の玉作り遺跡は西川津遺跡のみだが、中期になると平野部で9遺跡が増える。



図2 弥生時代後期の玉作り遺跡

後期になると遺跡数はさらに増加して、15遺跡となる。

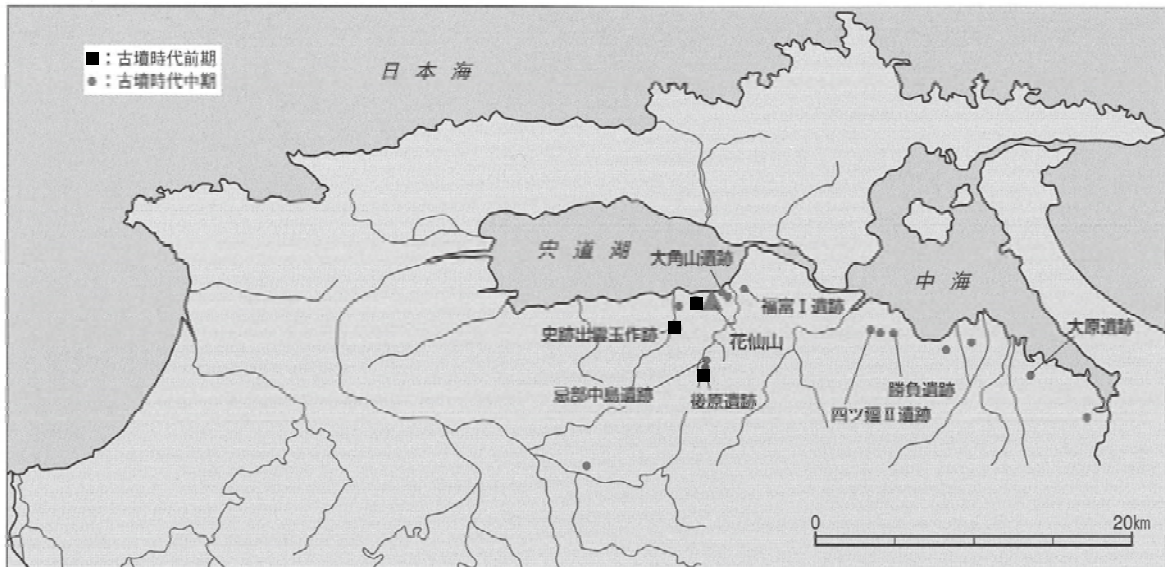


図3 古墳時代前・中期の玉作り遺跡

古墳時代前期になると、弥生時代までみられた宍道湖・中海沿岸部の玉作り遺跡が姿を消し、花仙山周辺地域に3遺跡が集まる。そして中期には再び中海南岸域や山間部に玉作りが拡大する。

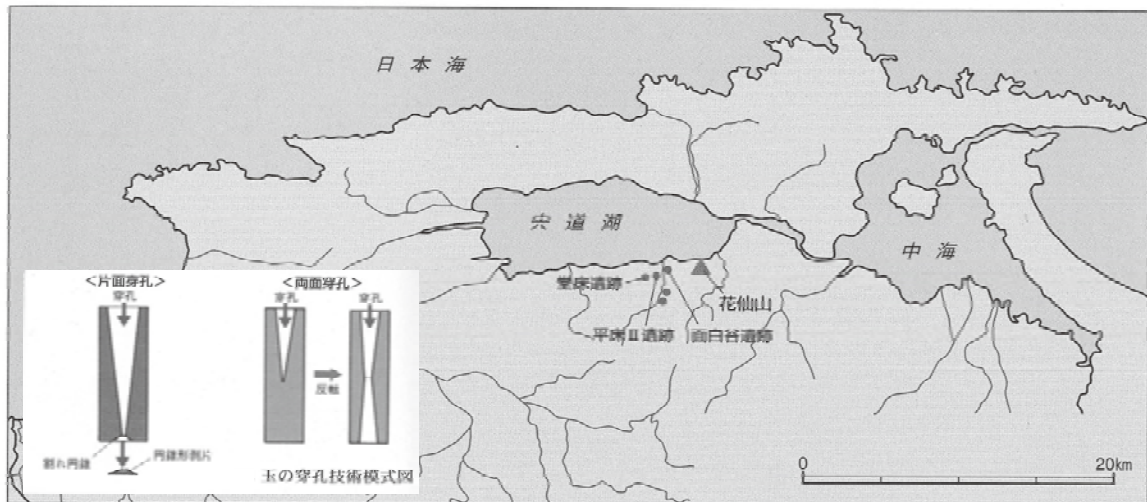


図4 古墳時代後期の玉作り遺跡

中期にみられた中海南岸部の玉作り遺跡は姿を消し、花仙山周辺に集中する。

表2 出雲ブランドの主な玉と副葬の移り変わり

継年代	時代	出雲ブランドの玉										玉の副葬			歴史上の主な出来事	
		碧玉		瑠璃		水晶(石英)				滑石類		中央	地方			
		管玉	丸玉	管玉	丸玉	花びら	丸玉	管玉	丸玉	管玉	丸玉	管内	東海・北陸・西日本	奥国・東北		
5世紀	古墳中期	●	●	●	●			●								404年 倭軍が帯方郡に進入
		●	●	●	●			●								478年 倭王武が宋より号を授かる
6世紀	古墳後期	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					527年 磐井の反乱
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					538年 仏教の伝来
7世紀	古墳終末期(飛鳥時代)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					568年 飛鳥寺の建立着手
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					603年 冠位十二階を制定
		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					645年 大化の改新
8世紀	奈良時代			○												663年 白村江の戦い
				○												710年 平城京へ遷都
				○												752年 東大寺の大仏開眼供養
9世紀	平安時代			○												794年 平安京へ遷都
				○												807年 「古語拾遺」
10世紀	平安時代			○												901年 菅原道真を太宰府へ左遷
11世紀				○												藤原氏の摂関政治の全盛
				○												1008年 紫式部「源氏物語」 院政の展開

※●は孔がある玉、○は孔がある玉と無い玉、○は孔が無い玉を表す。

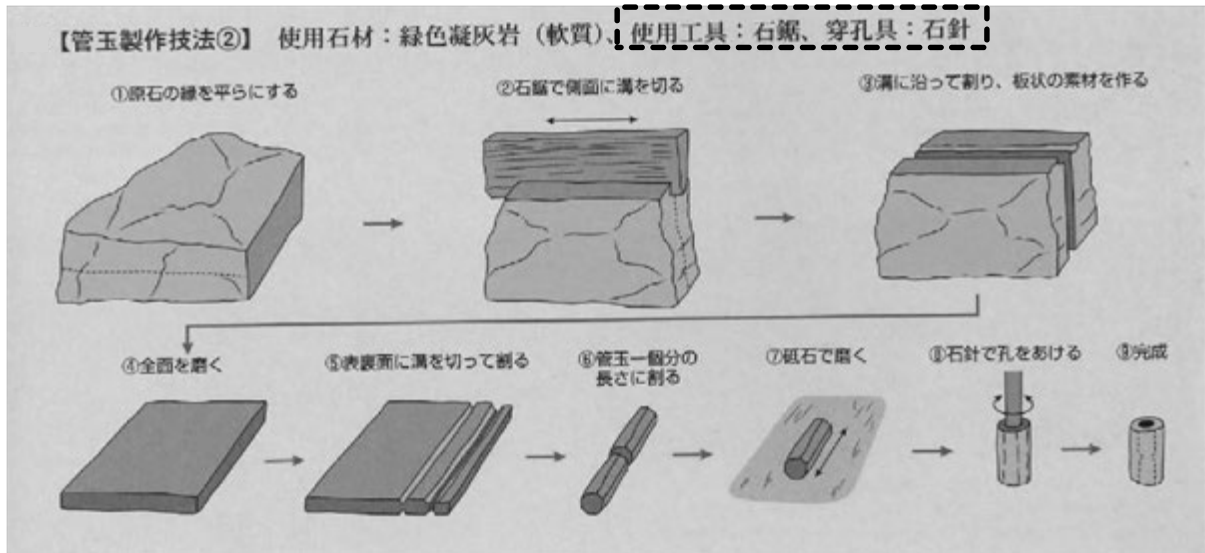


図5 弥生時代前期の管玉の作り方

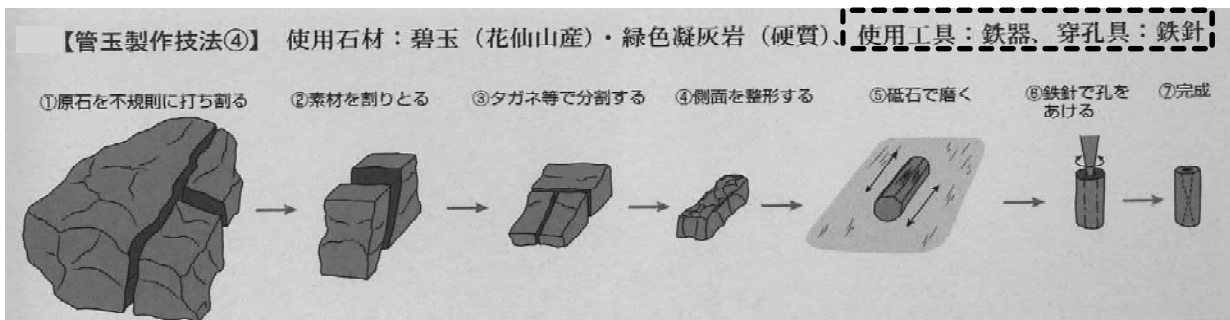


図6 弥生時代後期以降の管玉の作り方



図7 安来市・大原遺跡（5世紀）の玉類未成品と加工具



図8「忌部神戸」と玉作り遺跡

最質な玉材（碧玉・瑪瑙・水晶）を豊富に産出する花仙山の周辺には古墳時代の玉作り遺跡が密集しています。この辺りは奈良時代の「忌部神戸」に比定されており、その範囲は現在の松江市玉湯町玉湯・大谷・湯町・面白・布志名・東忌部町・西忌部町の範囲にあたると考えられています。

●主要玉作り遺跡

- | | | |
|-----------|------------------|------------------|
| 1. 田和山遺跡 | 2. 福富1遺跡 | 3. 大角山遺跡 |
| 4. 忌部甲島遺跡 | 5. 後原遺跡 | 6. 校の木古墳群 |
| 7. 杉谷遺跡 | 8. 面白谷遺跡 | 9. 史跡出雲玉作跡宮垣地区 |
| 10. 蛇喰遺跡 | 11. 史跡出雲玉作跡宮ノ上地区 | 12. 史跡出雲玉作跡玉ノ宮地区 |
| 13. 平床2遺跡 | 14. 岩屋遺跡 | 15. 堂床遺跡 |

※図表類は、2009『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』島根県立古代出雲歴史博物館 より一部改変して転載

玉の種類



(島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録2009 「輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り」より一部改変して作成)

本資料の関連玉作り遺跡の分布と玉類石材の主要産地

- | | | |
|-------------------|--------------------|---------------|
| 1. 八代玉作遺跡 (千葉県) | 12. 曾我遺跡 (奈良県) | ■ 弥生時代玉作り関連遺跡 |
| 2. 反町遺跡 (埼玉県) | 13. 纏向遺跡 (奈良県) | ● 古墳時代玉作り関連遺跡 |
| 3. 前原遺跡 (埼玉県) | 14. 布留遺跡 (奈良県) | |
| 4. 正直遺跡 (埼玉県) | 15. 南郷遺跡群 (奈良県) | |
| 5. 六反田南遺跡 (新潟県) | 16. 青谷上寺地遺跡 (鳥取県) | |
| 6. 南押上遺跡 (新潟県) | 17. 妻木晩田遺跡 (鳥取県) | |
| 7. 浜山遺跡 (富山県) | 18. 百塚第一遺跡 (鳥取県) | |
| 8. 藤江B遺跡 (石川県) | 19. 西川津遺跡 (島根県) | |
| 9. 浜竹松B遺跡 (石川県) | 20. 忌部中島玉作遺跡 (島根県) | |
| 10. 八日市地方遺跡 (石川県) | 21. 史跡出雲玉作跡 (島根県) | |
| 11. 片山津玉造遺跡 (石川県) | | |



「古墳時代の玉作りと神まつり」関連年表

西暦	時代	主な出来事 (付: 古代玉作りの動向)	本資料の関連玉作り遺跡
BC200	弥生前期	稲作農耕が伝わる (北部九州・山陰での朝鮮半島系碧玉製管玉の流通) (山陰での軟質緑色凝灰岩製管玉生産の開始)	島根・西川津遺跡
	弥生中期	金属器・ガラス加工の開始 (北陸(菩提・那谷)産碧玉製管玉の生産と流通)	鳥取・青谷上寺地遺跡 石川・八日市地方遺跡
AD1	弥生後期	鉄器の本格的普及 後漢光武帝より「漢委奴国王」金印を賜る(57) (硬質緑色凝灰岩製管玉の流通) 倭国大乱	鳥取・妻木晩田遺跡 島根・史跡出雲玉作跡宮ノ上地区
100		200	奈良・纏向遺跡
300	古墳前期	卑弥呼、魏に遣使(239) 古墳の造営が始まる (緑色凝灰岩製腕輪形石製品の生産と流通) (碧玉・メノウ・水晶製勾玉、滑石製玉類の生産と流通) (関東での滑石製・緑色凝灰岩製玉類、メノウ・水晶製勾玉の生産)	石川・藤江B遺跡 石川・片山津玉造遺跡、浜竹松B遺跡 新潟・南押上遺跡、六反田南遺跡 島根・史跡出雲玉作跡71CII号住居 埼玉・反町遺跡、前原遺跡、正直遺跡 千葉・八代玉作遺跡
400		古墳中期	誉田御廟山(伝応神陵)古墳、大山(伝仁徳陵)古墳などの巨大な古墳が造られる(5世紀前半~中ごろ) 倭の五王が南朝に遣使 (片面穿孔碧玉製管玉の出現) (ヤマト王権による玉生産の最盛期) 「ワカタケル」銘文入鉄刀・剣が九州と関東で出土(辛亥年:471)
500	古墳後期		横穴式石室の普及 (出雲玉作りの最盛期、以降の出雲産の玉の全国的流通) (畿内における金属・ガラス製玉類の盛行) 仏教が伝来(538)
600		終末期	前方後円墳築造停止 飛鳥寺が建てられる(596) 大化の改新(乙巳の変:645) (出雲玉作りの終焉) 藤原宮遷都(694) 古墳造営停止 (東北における出雲産玉の大量消費)
700	奈良		平城京遷都(710) (鎮壇具・仏像装飾としての玉の使用) (出雲玉作りの再開) 東大寺大仏開眼(752)

(古代歴史文化協議会調査部会事務局作成)

基調講演講師・コーディネーター・パネラーのプロフィール

【基調講演講師】

梶山 林継 (すぎやま しげつぐ)

國學院大學名誉教授 1940 (昭和 15) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『下総国の玉作遺跡』千葉県教育委員会 (共著) 1973 年
『古墳時代後期の滑石質材玉作』『日本玉作大観』吉川弘文館 2004 年

【コーディネーター】

丹羽野 裕 (にわの ひろし)

鳥根県教育庁文化財課長 1959 (昭和 34) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討』『出雲における玉作の研究 I』鳥根県古代文化センター 2004 年
『松江市史通史編 1』松江市 (共著) 2015 年

【パネラー】

山田 琴子 (やまだことこ)

埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員 1977 (昭和 52) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『益子天王塚古墳出土遺物の調査 (3) - 衝角付冑 -』『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 11 号 (共著) 2010 年
『益子天王塚古墳出土遺物の調査 (5) - 挂甲 -』『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』第 13 号 2012 年

伊藤 雅文 (いとう まさふみ)

(公財) 石川県埋蔵文化財センター国関係調査グループリーダー 1959 (昭和 34) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『古墳時代装身具と北陸の玉』『古墳時代の王権と地域社会』学生社 2008 年
『腕輪形石製品生産モデルの素描』『古代学研究』187 号 2010 年

卜部 行弘 (うらべ ゆきひろ)

奈良県立橿原考古学研究所総括研究員 1961 (昭和 36) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 (共著) 1993 年
『金の輝き、ガラスの煌めき - 藤ノ木古墳の全貌 -』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館秋季特別展図録 (共著) 2007 年

小山 浩和 (こやま ひろかず)

(公財) 鳥根県教育文化財団調査室副主幹 1970 (昭和 45) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡』鳥根県教育文化財団調査報告書 89 (共著) 2004 年
『湯坂遺跡・福留遺跡』鳥根県教育文化財団調査報告書 102 (共著) 2005 年

岩橋 孝典 (いわはし たかのり)

鳥根県教育庁古代文化センター専門研究員 1970 (昭和 45) 年生まれ
〔玉類研究等の主な論著〕
『弥生王墓誕生 出雲に王が誕生した時』鳥根県立古代出雲歴史博物館企画展図録 (共著) 2007 年
『山陰から畿内への道 I - 弥生時代末～古墳時代中期の山陰系土器からのアプローチ』『古代出雲の多面的交流の研究』鳥根県古代文化センター 2011 年

第 1 回 古代歴史文化協議会講演会資料

発行年月日 平成 27 年 11 月 15 日

編集 古代歴史文化協議会調査部会事務局 (奈良県立橿原考古学研究所)
〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町 1 番地
TEL : 0744-24-1101 FAX : 0744-24-6747

発行 古代歴史文化協議会

印刷 株式会社明新社 <http://www.meishin.co.jp/>

